目次

佛教の倫理觀……本多日生
政道と佛教……本多日生
法華三聖に對する感想……井上哲次郎
文化運動私見……武田顯龍
記事報道十數件……
法華經要文講義……本多日生

第廿六年三月號

時言

法華經の倫理觀

本多日生

一、總論

倫理上の重大なる要點は、倫理の根柢と倫理の德目、さうしてその倫理の根柢と德目との關係、又その德目を實行する力、さう云ふ事が大切なる點であらうと思ひます。それ故に、法華經の倫理觀として講述する場合には、法華經の倫理觀の根柢、法華經に依つて現れて居る德目、その兩者の關係、さうしてその實行力の點を考察しなければならぬと思ふのであります。それが法華經の大敎義として顯はれて居る人、理、果と云つて、吾々の精神を明かにすることゝ、宇宙の實相を明かにすることゝ、本佛の實在を明かにすることゝの三つが、即ち倫理の根柢を成すものであると思ふ。即ち吾々の心に基いて居る倫理の根據と、宇宙の眞理に基いて居る倫理の根據と、本佛の偉大なる力に基いて居る倫理の根據とが大切であると思ふ。又德目の場合には、法華經の敎義がどう云ふ有樣になつて居るか、それが倫理上の箇條を明かにして行く譯になると思ふのである。實行力の點は、即ち行法であつて、その

法華經の教義に基いて實行して行く、そこに倫理上の實行力を生ずるのであります。それ故に、既に諸君が法華經に依つて研究せられて居る五大要義、それを進めてお考へになれば、法華經は大なる宗教であると同時に、又完全なる德教であり、さうしてそれが偉大なる哲學でもあると思ふのであります。今の多くの研究が辿つて居る、倫理、哲學、宗教を分離して考へて居るやうな方法は、是は改善しなければならぬと私は信ずるのであります。偉大なる宗教であれば、その根柢には哲學も倫理も一元でなければならぬ。又實行上に於て道德上の價値を有つて居ないものは、完全なる宗教ではない。又道德としても、それが完全であるならば、他面には宗教的の要素がなければ、實行の力が現れて來ないであらう。故に、今の多くの人が辿つて居るやうに、全然宗教と分離したる道德とか、又は哲學の承認を經ないで、習慣法に基く所の道德、或は部分から觀察して居るやうな倫理觀は、淺薄なるものであると思ふ。總ての人類が遵奉すべき完全なる道德は、矢張り哲學上からも宗教上からも認めらるべきものでなければならぬ。宗教の立場からは反對せられ、哲學の立場からは否認せらるやうでは、その道德は何處かに缺點を持つて居るものと云つて宜からうと思ふ。それが法華經に於ては、その三方面が調和されて居るのであります。之を宗教的に研究するとか、哲學的に研究するとか、或は倫理的に研究すると云ふことは、それは研究者が便宜にやつて居るのであつて、完全に法華經を研究し了ると云ふには、三方面を整へて、三方面を何れも遺憾なき點に迄研究を進めて行くことに於て、始めて法華經を會得したと云ふことになるのであらうと思ふ。そこで、そこに達した時には、一の完全なる宗教觀が成立つ時、他面には、道德的哲學的の意味を包含したことになつて行く。それ故に、さう云ふやうな整うたる會得が己れの信仰を支配するならば、その信仰の内容は、一面には倫理、一面には信仰を押へて居つて、實行の上にも常にそれが現れて、單に不完全なる宗教の信仰とか、宗教的の善と云ふことでなくして、宗教上の善を云ふと同時に道德的の善、即ち社會國家人類の上に、一般に共通して居る所の道德を實行することが、法華經の修行となるのであり、法華經の信仰の現れてあると云ふことになると考へて宜い。さう云ふ風な意味を、極く大體ではありますが、これより御紹介申上げやうと考へるのであります。

二、倫理の心的根據

そこで第一には、倫理の根柢であります所の、只今申した吾々の心の本質に就て研究し、更に宇宙の實相に就て、又本尊の實在に就てお話をして見やうと思ふのであります。

心の眞相を明かにしないで倫理を打立てゝ居るが如きは、是は甚だ淺薄なるものであつて、西洋の倫理學が、種々なる變遷を辿つて來ましたけれども、今日は、自我實現と云ふことに倫理上の方針が定まつたと云つて宜い。それが吾々から觀ては、自我の研究が不十分であること故に、甚だ贊成し難いことであるけれども、色々な倫理說を棄てゝ自我實現と云ふことに這入つて來ただけは、心に根據したる倫理でなければならぬと云ふことを自覺したので、そこだけは採るべきであると思ふ。もう一段心そのものゝ研究が發達して來れば、東洋の倫理に接近することが出來る。今頃漸く、倫理の根柢は心に基かなければならぬと云ふことに氣付いて、俄に自我說を唱へて居るが、自我そのものの分析が十分に行つて居らない。それは色々の事情が關係したことでもありませうが、西洋の哲學そのものも、矢張り心の方の研究を疎かにして宇宙の原理原則を調べる方に行つて居つたのである。佛教で云へば宇宙觀とか實相觀とか或は眞如論と云

ふやうな冷かなる方に這入つて行つたものが哲學となつて居り、人身觀と云ふ心を基としての研究は哲學者が棄てゝ居つた。それが最近に至つて獨逸のオイケンは、哲學はさう云ふ原理の學にあらずして生命の學であると云ふことを云ひ出した。是が最も新らしい哲學であると持て囃されたのであります。オイケンは日本に來ると云ふことでありましたが、來たならば西洋風の哲學をやつて居る人が目覺める事になつたのでありませうが、來ないものでありますから、矢張り哲學と云へば冷かなる理論を研究する學であると今尙思つて居る人が多いのであります。佛蘭西にベルグソンが出て、オイケンと相列んで新らしき哲學の建設者と謂はれて居りますが、この人は哲學を精神の方向からの研究を進めて行つて、今迄心理學としての心の働を調べて居つたのが、その心の本體に這入つて、そこに哲學の基礎を築かうとすることに依つて、ベルグソンの哲學が出て來たのであります。斯くして生命哲學若くは精神哲學と云ふものは、西洋では新らしいものであります。倫理學でも自我實現說が新らしいものとして現れて來たけれども、最近にそれに氣が付いたのであるから、研究が疎漏であります。その結論がはつきりして居らないが、研究の道程に於ての方式が整頓して居るが爲めに、非常に美しいやうに見えるのである。譬へて見れば、お膳の運び方とか列べ方とか、挨拶の仕方が良いから御馳走かと思ふけれども、愈々蓋を取つて見れば御馳走はまづいと云ふやうなものであります。實際の價値は有つて居らぬと私は思ふ。所が東洋の方面は、最初から哲學倫理宗教とも、總て心の方面から研究して居り、それが非常に發達したのである。その中にも釋尊は、心の偉大なるを悟つたので、釋尊の悟と云ふものは、一方から言へば宇宙の眞理を悟つたと云ふけれども、一方から言へば自分の心を悟つたと言つて宜い位であります。そこに華嚴經の如き偉大なる教がある。華嚴經は何を說いたものであるかと言へば、釋迦が悟を開いた瞬間の一念を說明したものである。菩提樹下に端坐冥想して、はつと悟つた一瞬の精神を說明すればどう云ふものかと云ふことを、堂々たる八十卷の大經典に依つて說明して居る。說明は長くなつて居るけれども、それは何かと言ふと、纏めればはつと悟つた瞬間の心である。それ故に、一心法界に遍ねく一念三世を包むと申して居るのであつて、一つの心の中に全宇宙が這入り、はつと思つたその一と思ひの中に無限の時間を包括して居るのであるから、この無限の時間と、この無限の宇宙が、釋迦成道の瞬間の一念に包括されて居ることを說いたのであります。その一念が一切を包括すると云ふ思想を十分に練り上げて、それが完全に達したのが、法華經の一念三千論であります。その位、精神を基として根據を築いた思想は、人類文化の中に於ては、佛教が最高完全に達して居ると云つて宜い。今の精神哲學とか生命哲學とか云ふやうな不完全な說とは餘程違ふと云ふことを認めなければならぬと思ふ。

三、法華經の心的說明

そこで、さう云ふ偉大なるものが佛教であると云ふ著想を一つ定めて置いて、さうして法華經の心に關する說明を見て參りまするならば、吾々苟も命あるものには、種々の性質と相を有つて居るものであると云ふことを明かに說いて居るのであります。それを種々性相體と申して居りまするが、吾々の心の有つて居る性質と相貌、それを分析すると種々樣々になる、それを包括して居るものが心である。決して單一なる者ではない。人間は罪なものであるとか偉いものであると云ふやうな、そんな簡單なことの云へるものではない、種々の性相を包含して居るのである。それを極く疎雜に分ければ善惡の二方面と云ふことになな

るのであります、善に向いて居る方面にも多くの階段がある、惡に向いて居る方面にも多くの階段がある、故にその階段を之を十界と稱して居る。下は地獄より上は佛に至るまでの總ての性と相とを吾々の心の中に悉く持つて居ると云ふことを說いたのである。それは到底孟子の性善說とか荀子の性惡論と云ふやうな、さう云ふ雜駁なるものではないのであります。又西洋の基督教は、人間は罪の子だと云つて居る。さう云ふやうな簡單なるものとはまるで選を異にするので、堂々たる哲學に根據して現れて居るのであります。

四、佛陀の精神狀態

その十種の性相はどう云ふ心を指すかと言へば、第一が佛の慈悲の心である。その慈悲と云ふのは非常に完全な意味であつて、範圍も廣いし有らゆる物の間に行亘つて居る所の親切、その親切も殆ど言ひ表し方が無いから大慈大悲と云つて居ります。唯だそれが、大の字が附いて居るから大きいのだと云ふ位な意味ではないのであります、實に偉大なるもので、それは三緣の慈悲と稱して、法緣の慈悲、有緣の慈悲、無緣の慈悲と分けて居る。法緣の慈悲と云ふのは、その相手を見て親切を盡すのではないのであります、直接その人が居る居ないに拘らない、その事は斯くあるべきである、どうしても是を斯うして置く方が總ての者に幸福になるといふ事は何處迄もそれに盡して行く、是が總ての者に害を與へるものだと云へば、それを除く事に努力する、それに非常に熱心のあるのを法緣の慈悲と申すのであります。有緣の慈悲と云ふのは、自分の親しい者に對する慈悲で、妻子を愛するとか朋友を愛するとか、自分の恩を受けた者に盡すのを云ふのであります。忠義も親孝行も有緣の慈悲である。國を思うて命に懸けてもその君を守護しやうと云ふのは、それは矢張り慈悲の一種であります。親孝行をするのも、親が子を愛するのも、皆慈悲の活動であります。斯う云ふのが有緣の慈悲であります。無緣の慈悲と云ふのは、直接の關係は無いけれども、廣く考へれば社會は互に相倚つて成立つのであるから、人類の總てに亘るは勿論のこと、仁禽獸に及ぶと云ふ所までその親切が及んで行くのが無緣の慈悲であります。こゝに人が死んで居る、見ず知らずの者であるけれども可愛さうなものであると云ふ精神が起る、是が無緣の慈悲である。それが佛に於ては非常に發達して居るのである。吾々人間の間で謂ふ所の道德と云ふものは、自分に緣のあるものから働いて居る、緣の無いものは敵として喰ひ合ふ、緣が遠ければ決して可愛がらないのみならず、敵として排斥するのであります。所謂民族的の觀念を壓迫すると云ふやうな事は、唯だ自己と同じ民族であると云ふことに依つて緣の有るものだけ可愛がるので、民族が違ふと云ふことになると敵視する。又國民と云ふ觀念から、同一民族でも國の組織が違つて居れば敵視すると云ふことになる。それは皆、無緣の慈悲が發達しない、人類の文明が低級であるが故に、さう云ふ現象を呈するのであります。今の普通の人の謂ふ道德は、露骨に言へば根據は無い、比較的良しいと云ふやうな便宜的のことが多く行はれて居るのである、それでも無きには優ると云ふやうなものである。根抵から道德を論じて行く時には、人間には種々の性想がある、その最高の佛性を十分發揮して、法緣、有緣、無緣の慈悲の全分を滿足すると云ふ信念に基かなければならぬ。それが發達せぬから有緣の者に對しても親切が起らないので、無緣の者のことは少しも考へて居らない、法緣の慈悲などは思つても見ないと云ふことになつて居る。古より世に志士仁人と謂はれて居る人は、この法緣の慈悲に依つて働いて居る人である。それが特別人間とされて居るのであるけれども、法華經の理想を

言へば、この世に志士仁人と稱するやうな特別扱ひをしないで、一般の人間がさうならなければならぬ、それまで徹底しやうとするのが法華經の理想である。總ての人間が志士仁人として社會に立つやうにしやうと云ふのであります、又立ち得るものであると云ふ事を餘程强く、今の人がさう云ふことは到底出來ないと思ふ程の事を、必ず出來ると云ふ確信を以て敎が立てられて居るのであります。

五、菩薩、緣覺、聲聞の精神狀態

次に現れて來るものは菩薩の精神であまります。是は矢張り親切あり慈悲あるものであります。唯だ佛程完全に發達しないけれども、矢張り三種の慈悲を有たぬものではありませぬ。菩薩は有緣の慈悲を持つて居るが無緣法緣の慈悲が無いかと言ふと、決してさう云ふものではない。譬へて見れば佛は十五夜の滿月の如く、その慈悲は圓滿に發達し活動して居る、菩薩の方は十四夜以下の月である、菩薩の上等の所に行けば殆ど佛の壘を摩するまでに行きまして、等覺の菩薩と申して佛に等しい、十四夜の月を見て「今夜は十五夜の滿月かいなあ、いや十四日かも分らない」と云ふ、實に滿月に等しい所まで行くのが菩薩であります。故に第二にある菩薩性と雖も非常に偉大なるものである。

それから緣覺、聲聞の心がある。是も親切が無くて、自分の事だけ考へて居る獨善主義のやうに解釋して居る所もありますけれども、能く〻〻調べればさうでもないのである。非常に慈悲心を以てやるけれども少し臆病な所がある、困難に遭遇すると閉口垂れるのである、元來は非常に親切で行くけれども、少し面倒な事が出て來ると親切が壞れる、そこが菩薩と違ふ。お經の中には餘程うまくその事が說いてあります。鹿の王が自分の部下を引連れて歩いて居つた時に、そこに恐ろしい事が起つた。例へば獵師が來て之を獲らうとするとか、或は山火事が起つて、うか〳〵して居れば燒殺されるやうな恐ろしい事が起つた際に、自分の部下のことは忘れて、不斷は親切に部下を愛して居るけれども、山火事が起つたと云ふので慌てゝ自分が先に逃げ出す、その爲めに間拔けた鹿は燒殺される。是が聲聞緣覺の親切である。親切が無い譯ではないが、大事が起つた時には先になつて逃げる。菩薩はどうかと言ふと、象王の如く何處迄もその部下の象が避難し了るのを見屆けて、最後迄踏止まつて居つて、是なら宜しいと云ふ時に身を以て脫れる、或は自分が難に殉じても部下を助ける。斯う云ふやうな事が說いてある。色々さう云ふ譬が澤山お經にはありまするが、是が殊に大事な點である。道德上の非常に大きな問題になる。そんな象の譬などは何でもないと思ふけれども、之を實際の上に移したならば非常に大切な事で、大和魂とか英雄の精神は皆この菩薩の精神の一部をやつて居るのである。例へば船長が、その船が難破せんとする時に際して、總ての乘客や乘組員を避難さして、最後に自分が脫れる、脫れることが出來なければ船と運命を共にする、是が菩薩の心であります。

六、天上界の精神狀態

聲聞緣覺の下に天上界と云ふのがある。之も非常に和はらいだる精神でありますが、併し快樂を主にする精神である。故に善を作すと云ふよりは、自分が面白いと云ふことを目的として居る。人間でも道德の方よりは自分の幸福主義に依つて、別莊を拵へるとか酒を飲んで樂むと云ふやうな事の爲めに精神の多くを引付けられて居るのがある。それは天上界を理想して居るのである。汝の欲する所はと云ふと天上界に晝寢をしたいと云ふので、それは善いことではない。天上界に於ては還墮三途と云つて、三途と云ふのは

地獄のことであります、還墮と云ふのは還つて墮つると云ふので、非常に愉快だと思つて居る中に、自分の果報が盡れば引つ繰返つて地獄に墮ちるのであります。二階で藝者を揚げて酒を飲んで踊つて居る中に、天井が抜けて下へ墮ちて死ぬと云ふのが還墮三途であります。自動車に乘つて喜んで居る中に、電車にぶつ突かつて頭を割つて死ぬと云ふのが還墮三途であります。是は決して望むべき所でないと云ふことが澤山說いてあります。花が萎み掛けた時の天人の憐れな光景が說いてある、鳥は鳴かず花は萎んで、榮華は破れて地獄の底に墮ちる光景が非常に委しく說いてあるのであります。

七、人間及び人間已下の精神狀態

それからその次が人間でありまして、是はどう云ふ精神であるかと言ふと、是は平和な道德的生活を爲すべきものとして說いてある。仁義忠孝の精神とか、先づ普通の人が見て善と思つて居る事柄が是を人間としてある。人間の方が道德生活で、天上が愉快の生活になつて居るから、その愉快の生活を攻擊して居ることが激しい、人間の方が果報が上のやうに說いてある。人間に生れたことを喜び、人間界には佛法があるが、天上界には佛法が無いと云ふことを說いて居る。人間の下は修羅であつて、修羅は鬪爭の精神、爭ひの心で、利害の觀念に走つて非常に激しい爭ひをする。その下には畜生がある。是は矢張り愚にして物事の條理が分らない、豚の如き生活が即ち畜生を能く代表して居るのである。唯芋のきれつ端を食つて、腹が大きくなればグヲ〳〵寢て居る、成身すれば叩き殺される、何の爲めに存在して居るか、その意味が分らない。併し人間にさう云ふ精神がある、さう云ふ風に、何の目的も無くして、只腹をこやしてぶう〳〵言つて居る人間が澤山ある。又自分の精神も時にさう云ふ風になる。その下には餓鬼と云ふがあつて、是は亦非常に慾望の爲めに苦みを受けるので、金錢の慾望でも、男女の慾望でも、名譽の慾望でも、分外な慾望を起して、得られざるものを求めて苦む。分に安んずれば宜いが、蒟蒻や味噌汁で滿足して居れば宜いが、それを刺身に變へやうとするから苦みが起る。生活の向上と云ふことも適當であれば佛教は反對しないが、それが決して適當に行かない。蒟蒻が刺身になつた位なら宜いが、刺身で承知が出來なくなつて鹽燒と云ふことになる、それが鹽燒でも滿足が出來なくつて、ウヰスキーを持つて來いと云ふことになる、傳に乘つて滿足して居つたのが自動車と云ふことになる、同じ自動車でももつと良い自動車が欲しいと云ふことになる、自動車が出來たら今度は別莊が欲しくなる、別莊を建てたらそこに女中を置かなければならぬ、それでも未だ滿足が出來なくて今度は何と云ふ風に、人間の貪婪飽くなきの精神は程度のないものである。是は初めから餘程節制して掛らなければ限りがないから、佛教ではこの餓鬼のあさましさを盛んに說いてある。佛教で斯くの如く十界を立てゝ居るのは決して無意味に立てたのではない。今の文明は餓鬼丸出して行くから、佛教の教義を聞いた者は、動ともすればその餓鬼道に墮ちると云ふことに氣を付けなければならぬ、「君、富豪と云つても佛教の教からは餓鬼だぞ」「全くその通り」と云ふことになる。それを簡單に分るやうに教へるのが佛教である。必ず諸君は、佛教を信ずれば餓鬼のやうな狀態でこの世を送つてはならぬ。

次には地獄でありますが、是は苦みが間斷なくあるのであつて、苦しいから腹が立つ、腹が立つから又苦しいと云ふことになる。泣き面に蜂と云ふやうなことで、所謂不幸に次ぐ不幸を以てする、そこが地獄の狀態であります。唯苦しいとか腹が立つと云ふのは地獄の淺ましい所である、泣き面に蜂と云ふその氣

分が地獄の精神狀態であると思ふ。お經を見るとさう云ふ風になつて居る。

八、人心と道德との關係

この十が誰にもあるのである。そこでどう云ふ具合に、これが道德的に說明されて居るかと言ふと、さう云ふ十の精神の中で、即今只今どの考に屬して居るかと云ふことを時々反省せしめやうと云ふことになる。その精神狀態の即今只今と云ふことが非常に大事な敎訓となつて法華經に於ては現れて居る。それが一念三千である。一念三千とは即今只今の心何れに屬すやと反省せよと云ふことである。唯だ一念三千の敎は六ヶしいと云ふだけではない。精神は常に動いて居る、時には菩薩になり時には餓鬼になり地獄になる。それを即今只今の心と云ふ所から反省するのが一念三千の敎であります。

所が法華經はそこにどう云ふ風に敎へて居るかと言ふと、非常に有難いことは、この十種の中に於て、佛の精神が活動しやうとして非常に强く働くのは人間の狀態であると云ふことを說いたのである。種々なる誘惑の爲めに、所謂社會の腐敗とか或はその國の文明の間違つた狀態、家庭の間違つた狀態に依つて、子供が出來損ひになり、佛性が現れ惡くなつたのである。之を理想の社會理想の家庭、理想の文明に置けば、人の子たるや必ず佛性を現す方に向つて行くと敎へて居る。故にこの佛性に就ては、行佛性と云ふことを法華經は說いて居るのである。行と云ふのは今て言ふと顯動すると云ふことて、佛性を持つて居ると云ふばかりではないのであります。その佛性が動いて、抑へんとしても抑へることの出來ない勢力を有つて居る、それが顯動的と云ふことであります。卵が腐つて居るか活きて居るか分らないと云ふやうなのではなくして、最早ひよこになつて出やうとして居る、それが人間であると說いて居る、それであるからして善き緣を與へさへすれば、佛性が目覺めて來て、慈悲の精神に働かうとする所のものである。又それに依つて働くこと程氣持の宜いものはない。貪慾の精神は非常に强く起るやうであるけれども、驕つて考へたら決してそれが自分の精神ではない。

九、人心の一相一味

その事を藥草諭品には能く說いてある、一相一味解脫相離相滅相と說かれて居る。是が即ちこの人間性を明白に敎へて居るのである。この一相と云ふのはどう云ふのかと言ふと、皆美しい佛の相であると云ふのであります。表面から見ると男とか女とか容貌が良いとか惡いとか云つて居るが、この人間の精神を徹底的に見た時に於ては、一相一味である、釋迦はそこを熱烈に說いて居る。今現に惡い事をして居る者でもそれは思想の變態である、恰度酒に醉つたやうなものである、目覺めれば一相一味、立派なものであると云ふことを說いて居る、非常に强く說いて居る。一味と云ふのも、苦いとか酸いと云ふやうなものではない、どれも甘い、甘露の味がする、どの人間も嚙みしめて見たならば甘露の一味である。表面を一寸甜めて見ては汗臭いのも油臭いのもあるが、能く嚙んで見れば甘い。鰯を嚙んで居ると、嚙めば嚙む程中から味が出て來るやうに、皮相の觀察をするから色々になるが、本來は一相一味である。

一〇、解脫相離相滅相

それてはそれはどう云ふ相かと云ふと、解脫相、離相、滅相と說いた。解脫相と云ふのは、色々なる束縛から解脫すると云ふことて、所謂解放とか自由と云ふことてありますが、この頃の自由解放は、法律上とか社會制度とか云ふことからのみ解放とか自由を叫んて居るのてありますけれども、佛の云ふのはさう

云ふ事てはない。人間は酒に酔つたやうに心の迷ひからして種々なる煩悶に囚はれ、間違つたことからして色々の狂ひが起つて來るのてある。自分の煩惱の爲めに誤つた行動を執るから、その結果に於て非常に混雜が起つて來る。初めから精神の方向を間違へないやうにやつて行けばよいのて、それが一ぱい飲んだ爲めに狂つて來る、さうして翌日になつてどうも困つた事が出來た、と云ふことになる。それて仕方がないから、つい友達の錢を取つたと云ふことになる、取つたが爲めに監獄に這入る、監獄に這入つたから友達が相手にして呉れない、仕方がないから又やると云ふことになる、さうして段々惡くなつて行く。元からそう云ふやり損ひはしないと考へて居るのてはない。さう云ふへまな事をして遂に人生を失敗て終るが宜いか、正しき道を履んて、そんなやり損ひをしないやうにして、幸福なる自由なる生活に入るが宜いかと言へば、勿論幸福なる自由なる生活が宜しいと云ふことになる。それならさう云ふことから解脫せよと云ふのてあります。後ろ手に縛られて居るが宜いか、縛られぬが宜いかと云ふことになる。解と云ふ字は繩を解くと云ふことてあります。脫と云ふ字は籠に入れられたその籠を出ることてあります。籠の鳥と云ふことがあるが、自分がその籠を作つて這入つて居るのて、それから出るのが解脫相てあります。もう一つの離相と云ふのは、是は罪惡から離れることてある、前のは苦しみから解脫するのてあるが、今度は惡い事から離れるのて、解脫相離相と云ふのは、苦悶を解脫し罪惡を遠離すると云ふことてある。誰も泥棒はしたくない、泥棒をした者ても、それに家庭を與へ妻を與へ職業を與へて、「どうぢや泥棒を止めるか」と言へば、喜んて、「止めます」と云ふことになる。職業が無い、監獄を出ても誰も親切に世話をして呉れない、寒くなつた、腹が空つた、仕方がないから一つやれと云ふことになるのて、決してそれは彼の欲する所てはない、一等旅館に泊めて置いて、何日居つても宜いと云ふことになれば決して泥棒には行かないのてある。次の滅相と云ふのは、煩惱を滅するのてある。所謂人格の修養を積んて精神の働の上に於ても惡いものを無くしてしまふ、煩惱の雲を拂つて佛性の月を輝かさうとは誰しも考へて居る。「貴方は永遠に迷ひたいかそれとも悟りたいか」と言へば、「悟りたうございます」と言ふに極まつて居る。一人として、煩惱を起し惡業を作つて地獄の苦しみをしたいと云ふ願書を出す者はない。然るにも拘らず、斷えずやり損ふのは導きが足りないからてある、故に我れ釋迦牟尼は人生に出て、この憐れむべき者の爲めに教を立てると云ふことを說いて居るのてあります。釋迦は人間を信用して居る、教ふるに道を以てすれば救ひ得るものてあると云ふことを信じて居る。必ず救へると信じて、そこて法華經に於ては之を事實に證明して來たのてある。例へば惡人がある、提婆達多の如き、あゝ云ふ罪惡を犯した者は惡から離れることが出來ないかと言ふと、さうてない、彼は惡より離れて天王如來となつて居る。婦人は色々愚癡煩悶がある、その愚癡煩悶から解脫して龍女は無垢證如來となつて居る。どう云ふ者ても皆悉く煩惱の雲を拂つたならば佛性の月を見ることが出來るのてある、十界皆成佛道と云ふことになつて居るので、法華は一相一味の意味合を事實に證明して居る。それの最も鮮かに示されたは阿闍世王てある、彼は罪惡に塊つて居りましたけれども、法華經の繫がりてある涅槃經の時に救はれて居る。佛は、煩惱を解脫し罪惡を遠離せしめんが爲めに衆生濟度をやつて居るのてある、さうして法華經は何者をも成佛せしめ得ることを證明して居るのてあります。斯う云ふ罪の人は救はれないと云ふことのないやうに、皆救つて居る。「それぢや斯う云ふ惡い者がありますが」と言ふと、「一番惡い者を連れて來い」と言つて皆救つてしまつたのが、法華經の皆成佛

道の意味であります、皆佛に成れることを證明したのであります。是が色々に譬へられて、藥草諭品に於ては、雨を得て總ての樹木が成長することに譬へられて居る。如何なる小さなものでも皆發育して行く、その發育の狀態はどうかと言ふと、善い方の佛性が發育することに說明された。それ故に、之を藥草と云はれて居るので、毒草ではないのである。煩惱罪惡の方の草が生えれば、それは毒草が生えるのである。人生には藥草が生える、社會の苦しみを癒する作用を爲す草が一ぱい生える。藥草と云ふのは道德生活をすることである、毒草は世の中に害を與へるものである。總てのものが、その分に應じて皆藥草として、發達すると云ふことを藥草諭品の中に委しくお說きになつて居る。信解品の中には、乞食になつた者が目覺めて、長者の家に戻つて家督相續をすると云ふことが說いてある。その乞食と云ふのは道德的に覺めないものを云ふのであつて、それが覺めて長者の資格に復ると云ふことは、皆道德性を發揮して來たことになつて居る。さう云ふやうな譬は法華經に澤山ある。毒量品に於ては醫者が藥を服まして病を癒すると云ふことがあるが、その癒と云ふのは、苦しみ、罪惡、煩惱であります、この煩惱業苦を三道と稱して居ります。煩惱を滅し、惡業を遠離し、苦しみを解脫すると云ふのが、滅相、離相、解脫相であります。煩惱業苦の三つが絡み絡んで吾々をして愈々迷ひに入らしむるのである。煩惱が起るから惡い業をする、それが爲めに苦しみが殖へる、苦しいから煩惱を起すと云ふことになるのであります。恰度監獄に這入る人間がさうである。煩惱を起したに依つて泥棒をやる、泥棒をやつたから監獄に這入つた、監獄に這入つたから苦しい、出て來ても餘り幸福の地位に置かれぬ、苦しいから矢張り煩惱が起つて罪惡を犯す、詰り常習犯と云ふことになつて來る。日本の監獄では百人の中六十何人、約七割近くは常習犯であります。十萬人位の犯罪者があれば、六萬五千人と云ふものは監獄を住家として居る。監獄の方ではさうであるが、道德の範圍から言へばまるきり監獄に行くべきものである、全部常習犯である。吾々は五百塵點劫の昔から煩惱業苦の三道を辿つて居るのである。恰度、監獄を出た晩に泥棒をして復た監獄に行く、あれと同じ事を吾々はやつて來たのである。人間の法律であるから吾々はそこから免れて居るけれども、もう一つ大きな法律から見た時には皆常習犯である、それを凡夫と云はれて居る。その煩惱業苦の病が癒えると云ふことは、一面から言へば道德的生活が開發されると云ふことになる、佛に成る前に煩惱業苦の絆が斷れるから行が正しくなり、精神の幸福が與へられ、物質の方も幸福になつて來るから、煩惱業苦が壞れて、そこに美しい生活が開かれる事になるのであります。さう云ふやうな譯で、吾々の精神狀態に、所謂佛性が顯動して行くことに於て倫理の根柢を打立てたのである。それは諸君の心に顧みたら分る、餘程惡い事をしても是ではいけないと云つて自身に目覺める、その大向上心が人間にはある、その目覺めるのを成べく能く目覺めるやうにしやうと云ふ所に、法華經の倫理の根柢がある、どうしたら佛性を能く目覺めしめることが出來るかと云ふ事が道德實行の問題であります。

（次續）

佛教と政道

本多日生

四、釋尊と轉輪聖王

佛教と政道との關係を明かにするには、釋尊と轉輪聖王とが極めて密接のものたることを、講明する必要があると思ふ。世の佛教觀の中には、佛教を目して厭世的宗教であるとか、又は未來觀的宗教、超世間的宗教であるとか、又は獨善主義だとか、いろいろケチを付けて居りますけれども、それは全然當らぬことで、極く佛教に暗い人の妄言に過ぎないのである、我國に於て最初聖德太子が佛教を採用せられた御趣意は、憲法の序に「天竺は輪王の佛典と」お書きになつた、佛教は轉輪聖王の教化の現はれだとして採用せられて居る、即ち理想的の國家文明を造る指導者が佛教なりとお考へになつて、聖德太子はこれに導かれて日本の政治をお執りになり、日本の文明を開發せられたのであります　後の排佛家が言ふやうに、佛教は厭世的だの退嬰的だのといふことは、日本の最初に聖德太子などはお考へになつて居らぬのである、畢竟、佛教に對する學問が衰へて儒者輩が朱子學くらゐを見て、輕卒に佛教を妄評したのである。

聖德太子が「輪王の佛典」と云はれたのは非常に意味の深いことで、これは佛教と政道との關係を見るに就て十分に研究を要する點であると思ふ、釋尊が御生れになつた時に人相見が寄つて悉多太子の人相を見た時に、このことは夙に言つて居ることである。長阿含經の卷の一に

太子初めて生るゝや、父の王槃頭、相師及び諸の道術者を召集し、太子を觀じて其の吉凶を知らしむ、時に諸の相師命を受けて觀じ、即ち前んで衣を披ひて其相あるを見、占ふて曰く、此の相あるものは當に二處に趣くべし、必然として疑ひ無し。若し家に在らば當に轉輪聖王と爲り四天下に王と爲り、四兵具足し正法を以て治め治むること偏枉ある無し、恩天下に及んで七寶自ら至らん、千子勇健にして能く外敵を伏し、兵杖用ゐずして天下太平なるべし。若し出家學道せば當に正覺を成じて十號を具足すべし。

これは悉多太子として生れられた時、人相見が語つたことですが、この子供は家にあるならば轉輪聖王とお成りになつて理想の政治を行ひ、恩は天下に及んで統ての寶が集り、國富み、多くの子供は皆勇健であり、外敵を服するに足り、威力盛んなるが爲に兵を用ゐずして天下泰平を致すのであると。こゝに釋迦の一面が見らるる、即ち政治家となれば模範的な轉輪聖王であり、その理想的の政治は今お話したやうに、正しき法を以て治め、而も勇氣あつて外敵を服する、恩威並び行はれて、兵を用ゐずして天下を泰平にするといふやうな意味である。これが釋尊

の生れたまひし時に語り會ふたことであります、今一箇所中阿含經の四十一の卷にも、略々相似たことが出て居る、そこには「天下を整御す」とあります、「轉輪聖王となつて天下を整御す」、世の中を整へてこれを統御して行くのである。理想的に世の中を治めて行く、さうしてその子供は皆勇健にして、他を服するに足ると說かれて居る。此處には刀杖を以てせず、法を以てして安穩なるを得んとあるが、法といふのは德敎であります、德敎を以て天下を治める。そこで釋尊が成長の後出家はしたけれども、それは全然轉輪聖王の觀念を捨てゝ居るのではない、轉輪聖王は正法を以て治めるといふ、德敎を以て天下を治めるのであるから、その德敎の根柢を衝いて、さうして完全なる德敎を發揚する爲に佛と成られたのである、故に「一代の說敎を法輪を轉ず」と稱して居るが、法輪といふは敎化の力であつて、武力でなく、權力でなく、又暴力でない、今の文明が禍を受けて居るやうなことを力としない、即ち道の力、法の力、善の力を以て、文明を造る原動力としやうとするのである、それ故に轉輪聖王のことを一名法行王と云ふ、法を行ふところの王といふのである、釋迦牟尼佛はその法を開き、その法を說き、その法を行ひたる所の大聖者である、法行王の先祖である、丁度日本の聖德太子が、自ら帝位にお卽きにならぬけれども、偉大なる效果を與へて、日本の文化を開發し、殊に精神的文化の基礎をお造りになつた、今日にして考へても、我歷史に聖德太子は異彩を放つて居られる、それと同じ譯なので、釋迦は出家成道をしたからというて、この文明を指導し、啓發して行く事から離れたのではない、その根本の德敎卽ち法を明かにし、法を與へんが爲めに佛と成つて居るのである、それ故に「法輪を轉ず」といふ、輪は轉輪聖王の輪寶である。さうして最後の拘尸那城に於て入滅せらるゝ時に、阿難が「斯ういふ片田舍で入滅せらるゝことは面白くない」と申した時に、釋尊は「さうではない、この拘尸那城は嘗て大善見王といふ轉輪聖王が居られた處である」と云つて、その場所を輪王の住んだ靈地なりとして、此處を選ぶと言はれたことが、阿含經の中に出て居る、それから阿難が「御入滅の後は如何なる葬儀の式を以て致すべきか」といふことを尋ねて、その時に佛は阿難に答へ給うて「そのやうなことは汝が考へなくとも多くの信者達が宜きまうにするであらう」と言はれた、而も阿難は重ねて三たび「どうか佛樣の思召も伺つて置きたいと思ひまするから、どのやうにして葬儀を營んだら宜しいか」と强いてお尋ね申した、その時に釋尊は「葬法を知らんと欲せば當に轉輪聖王の如くすべし」と言はれた、如來を葬るは轉輪聖王の葬儀の式に據れよと命ぜられたので、決して乞食坊主として死ぬやうな考は釋尊は持たれない。

それから又その途中に迦毗羅城の人民が「再び歸つて王樣になつて呉れ」といふことを願つて出たことがあります、その時にも釋迦如來は「今もやはり王である」といふことをお答へになりました、國王として政治を執るも、佛となつて敎を示すも、少しも異つたものでないといふことを答へられて、「今もやはり自分は王樣だ」といふことを言はれて居る、これはよほど大事な點だと思ふのであります、釋迦が出家したことを何か非常に異つたことをするやうに考へて居つたのは偏つた觀察で、釋尊それ自身は何も變つた事をして居るとはお考へになつて居らぬのである。さうして丁度御修行中に王舍城の頻婆娑羅王がお迎ひに行つて「山の中で行をするやうな事はお止めになつたら宜からう、私の國の半分を差上げる、私の兵隊の半分を差上げるから、どうか思ひ止まつて呉れ」といふことを言つた時に、釋尊は何と答へたかといふと、「娑伽羅龍王は牛跡の水を

求めず」、そんなに廣い國を戴いて淸まぬといふことは言はない、王舍城の半分は牛の足跡の水くらゐのものであらう、我が釋迦牟尼が世の爲に盡さうとして居る理想から云へば、それは娑伽羅龍王のやうなもので、娑伽羅龍王は大海の水を左右し、天に昇つて雨を降らす力を有つて居るものである、それを牛の足跡の水を遣るからと云つて、喜んで飲むことはあるまいと言はれた、以て釋尊が如何に大なる理想を懷いて居られたかが、分る譯であらうと思ふ、排佛家はいろいろ釋尊のことを傷つけたけれども、釋尊を崇拜した人物に就て見ても、嘗て天竺に阿育大王といふ王樣がある、その方の爲された事蹟が詳しく傳つて居り、非常に立派な政治を行はれたが、釋尊を政治の模範として戴いて居つたのである、支那では前後に唐の太宗ほどな明君は無い譯で、それが一番の佛教信者である、彼の韓退之は破佛家であつたけれども、大顚といふ坊さんが「あなたはそんなに佛教の惡口を言ふけれども、あなたが政治を執つて唐の太宗だけやれるか、あなたが文章を書いて羅什三藏だけやれるか」と言つたところが「どちらも敵はぬ」「そんなら餘りエラさうに言はぬが宜からう」と言はれた時に、韓退之が頭を掻いたといふ話がある、そのくらゐに唐の太宗は明君である、それは佛教の感化影響を受けて居つたのである、日本に於ては先づ聖德太子が不世出の聖者であるが、佛教の感化を受けた人である。だからして佛教を正統に受ける者が、悲觀厭世の者か、消極的の者か、政治に關係の無い者かと言つたなれば、さうでないことは鹹によく證明せられて居る譯である。

それからこの轉輪聖王を釋迦がどれほどに理想したか、それはどんな王樣かといふことを十分に明かにして置かなければならぬが、是は到る處に詳細に說かれて居る、轉輪聖王の話は阿含部だけでも何十ケ所とも知れぬほど出て居る、殊にその中で非常に面白いのは、「轉輪聖王は東の方の國に興る」と書いてあることで、さうして小さな國の王樣は皆これに從つて、轉輪聖王が四方を廻らるればこれを歡迎する、その時に轉輪聖王はそれ等の王樣に向つて言ふに「何もお前等は別の事をしなければならぬことはない、お前等の人民を正しき法即ち德教に依り道に依つて治めて、曲つた事をしないやうに、間違つた事をしないやうにするが宜い、さうさへすればそれがおれと同じ考なのだから、それで宜しい」と云つて少しもその國の物を奪はない、さうしてそれが東から南に行き、それから西へ廻り、北へ廻つてその轉輪聖王の輪寶が終ひに宮城の上に戻つて國王の上に止まるといふことである。この輪寶が日本の菊の紋になつて居ると云ふ、輪寶の劍を丸くしたのである、十六菊の紋は轉輪聖王の輪寶の劍を和らげて居るのである、それがどのお經にも東から南へ、西へ、北へ、さうしてもとの宮城の上に歸ることになつて居る、增阿含經にも、雜阿含經にも、長阿含經にも皆同じやうになつて居る。日蓮聖人が法華經翻經の記を讀んで非常に喜ばれて、この法華經が東北に緣ありといふのは、天竺から見ての言葉だから日本の國である、法華經は日本より興つて西を照すといふことに感激して、雨眼瀧の如しと喜んだのであります、この轉輪聖王はどのお經を見ても東から南へ、西へ、北へ、さうして東に歸ると說いて居られる、印度に於て斯ういふ思想がどうして現はれたであらうか、印度の國の樣子を見ても、海へ出て行く所はみな違つて居る譯である、さうして佛教が日本に來て留まつて居るやうな事から考へて、非常に意味の深いことであると思ふ、日蓮聖人はこの點に深い觀察をお持ちになつたと思ふのである。何れにしても釋尊の教化は轉輪聖王の政治と紙一枚の違ひである、彼れ自身に於ては何も違つて居るとは考へられてゐない、却つて伽毘羅衞の王にはならぬけれど

も、伽毘羅衛の國を出て、さうして全世界を統治するところの轉輪聖王の行くべき道を教へて居る所のものであると釋尊は考へて居られた、彼の日蓮が法華經を以て日本の生命として、日本乃至一閻浮提、日は東より西に向つて照すと言つたやうな考は、釋尊の御考より起つて居ることであります。轉輪聖王の特色は正しい道を基礎にして、さうして武力を持つて居つて、他の者に壓迫されないのみならず、その武力が優越な爲に兵を用ゐずして天下を服する、服したる場合は何ものも掠奪しない、正しき道を以て人民を治めて、間違つたことをしないといふ、所謂不正不義を懲戒するだけの實力を持つて居るものであつて、私が最初に政治の本領として述べたやうな事が轉輪聖王の政治の特色であります。

五、世間善導の教化

それから次に釋迦の教化は決して幽冥界の未來の問題とか、一般の宗教で言ふ事だけを教へて居つたものでなくして、世間を導く、今の所謂現實の文明を完成して行く努力であつた事を明かにしなければならぬ、そこに佛教が政治と密接に關係して來るのである。世間善導の教化といふ、この點は如何にも明白になつて居るので、雜阿含經の四の卷に舍衛國の祇樹給孤獨園といふ所に釋迦がお出でになつた時、年若き波羅門教の欝闍迦（うつしゃか）といふ者がやつて來て佛にお尋ねして言ふには、「どれだけの事を行へば現法安現法樂を受くべきか」、現法とは現在の事柄といふ意味、どうしたならば現在生活が安樂幸福に行きますかと尋ねた、その時に佛が「四ッの事をやれば宜しい」と答へ、方便具足、守護具足、知識具足、正命具足を擧げられた、この方便具足といふのは生活の方法で、即ち百姓になるなり、商賣人になるなり、官吏になるなり、實業家になるなり、職業を持たなければ、現在の幸福はない譯である、その事に熟達して、さうして、その業務を勵んで行くといふ事が一つである、それを方便具足といふのである。守護具足といふのはその得たる所の錢なり、米なり、所得をば十分に守つて、泥棒や火事に無くなさぬやうにしなければならぬ、他に預けるにしても、確實な所を見て預けなければならぬ、その得た金を粗末にすれば現在の幸福はない。善知識具足といふのは人間は始終災難にも遭ふし、人格を修養せなければならぬから、よき人から教を受けなければならぬ、實業家は算盤を持つて金儲けをするだけでよいと思つて居つたならば、必ず不正な財を得んとする結果は嘘を言うて商業の信用を失ひ、危い藝當を打つて失敗をし、つまらない事に苦勞をして間誤々々するやうになつて、眞の幸福が得られるものではない、それ故に現在生活には知識具足を大切にして、自分を教へ導いて呉れる人を持つて居らなければならぬ。今一つは正命具足、これは正しき方法に於て生活をするので、第一に虚榮を戒める、少ししか錢が入らぬのを金持のやうな顔をしたり、次には慳貪を戒める、澤山入つて來るのにケチな事をして、人の惜みを買つたり、出すべきものを出さなかつたりするやうな事は皆いかぬ、金錢の出入に就ては能く考へ、出すべき錢は出し、出すべからざる金は出さぬといふ事が、正命具足といふのである。この四ッの事が十分に行へれば現在の幸福があると說かれた。それから欝闍迦が未來の幸福の事を尋ねた、即ち後世安後世樂、それに又四ッを答へられた、これは信仰と戒律と布施と智慧と、この四ッが完備すれば死後に於て幸福が得られる、その四ッは斯うだといふことを詳細に說かれた。釋尊はこの現法安現法樂といふ事を問題にして始終說教して居られる、今の日本の佛教徒のやうに厭世悲觀の事や、世間を超越して傍觀するといふやうな、そんなことを言つて居らない、稼業をよく勉强し、儲けた錢を粗末

にしない、時々教を聽かぬといふと失敗の結果が現はれるといふので、實に正確な教を立てゝ導かれたのである。それで雜阿含經の中には「人道を具さに莊嚴し快樂豈是れに過ぎんや」と說かれて、釋迦の教はこの人の人たるべき道を飾嚴して行く、即ち人格を完成して行くので、眞の幸福はそこにあるのである、丁度論語の初めに「學んで時に之を習ふ亦說しからずや」とある、あれと同じであつて、人の人たるべき道を以て人格を完成して行く、そこに眞の幸福があると說かれて居る、厭世的の事ではしない。さうして又增一阿含の中にも、男女に五戒を保たすことを香と風とに譬へられてある、かやうな道德の考を個人的と貶するか知らぬけれども、個人の人格が善くなれば、それが人生社會に及ぶのである、恰も香のやうなもので、順風にも逆風にもよくその香は擴がるのである、東から吹いた時には西の方へ香が散つて行く、西から吹けば東の方へ香が行くのである、個人の人格の德香は順逆共に世の中を善くする、個人の人格を完成することは社會國家に影響はないと思ふのは、よほど愚な考であると說かれた。こゝに釋迦が個人の人格を善くせよとか、稼業を善くせよといふことは、順風逆風共に周圍に德の香を及ぼさんとする考であることがよく分る、「若し香あらば順風逆風によく聞がん」と說いて居らるる。さうして又長阿含の中に善生といふ者が佛を讃めて言つて居る中に、

よく覆へる者をして仰ぐを得、閉づる者は開くを得、迷へる者は悟るを得、冥室に燈を燃し、目あるには視せしむ、如來の所說も亦復是の如し、無數の方便を以て愚冥を開悟して、淸白の法を現じたまふ、所以は何ん、佛は如來至眞正覺なるが故に、能く開示して世の明導と爲りたまふ。

世の明導といふのは、世の中の明るい指導者といふので、死んでから舟に乘せてといふのではない。又增一阿含の中には、

二の妙法あり、世間を擁護す、云何が二法と爲す、所謂有慚と有愧となり。

と說かれて、人々の心に慚愧反省の心を促して、惡い事をしては恥かしい、濟まぬ、社會には長幼の別あり、秩序を重んじ、敬ふべきは敬ひ、善い事はしなければならぬといふ風な道德の生活を奬勵した、それが慚愧反省の心であります。それが無かつたならばこの世の中は打壞してある。免かれて恥無しといふに至つては、この世の中は打壞してある、それ故に、我が釋迦牟尼佛が人々に慚愧の衣を着せて行かうとするのは、即ち世間を擁護し、この人生世間の破壞を受けぬやう、完全に發達せしむるといふので、世間を擁護すと言はれた點を留意すべきである。又雜阿含經の中にも「慚愧とは樂住を得て現法を防護す」と說いてある、この世の中に住むことを樂しんで、現在に幸福なる生活を遂げ、現法を防護して、この現在が破壞せられ暗黑に陷るのを防護する爲に、人心に慚愧反省を促すのである。又增一阿含の中に「仁を履んで慈を行ふ、この德廣大なり」とある、我が教の生命は仁を履んで慈を行ふにあつて、この德は廣大である、一人に止まらない、仁といふことは一人では起らない、慈といふのもその通りで、相手に對して仁慈を施すのであるから、その仁慈の教を弘めて行けば、社會が圓滿なる發達を遂げて行くのである、それ故にその德廣大であり、その結果は無濁歡悅の人生を得ると說いて居らるるのである。濁りなき歡び悅びの生活を理想とする、歡悅の裏は煩悶懊惱苦痛である、であるから釋迦は人生を無濁歡悅ならしめんとして努力したるものである。自己の安心の爲ではない、現在の人生の溷濁に陷らんとするのを防いで、濁りなき所謂淸白といふ澄み切つた社會を造出し、人々に歡びを得せしめんとしたのである。

又文明の進歩といふことを非常に考へられたからして、そこで阿難に言はれた、增一阿含四十八てありますが、

阿難よ我は是れ無上の法王なり、我れ今無上の善法を遺し、慇懃に汝に囑累す、汝は是れ釋種子なり、邊地の人と爲ること莫れ、斷種の人となること莫れ。

これも先に言ふたと同じことになるのてあり、何も乞食坊主だの薄つぺらな宗教家として立つて居るのてはない、おれは此上もなき法行王てある、それが世間の方から行かないて、佛教の方から行くところの我は法王てある、「今我れ無上の善法を遺し、慇懃に汝に囑累す」、理想の文明を造るところの法の全部を遺し置く、「汝は是れ釋種子なり」、お前は釋迦族て刹帝利種てあり、大政治家たるべき所から出た者てある、邊地の人と爲ること莫れ、田舍者、野蠻人、さういふ者を以て甘んじてはいけない、元來釋種子てあつて、家に居れば伽毘羅衞王の王族として世に立つ者てある、下らない人間てはない、今我れ法行王の德教を汝に託するのてあるから、邊地の人となつてはいかぬと說かれた。これは阿含て證明したのてあるが、法華經のやうな教に至り、どんな深いことを說いても、殆んど現在と關係がなくなるやうな高遠な哲理を話す場合ても、釋尊の御精神は皆人生の繫りを考へて居られる、だから法華經には「我が此の法印は世間を充足す」と說いてある、この法印といふのは「實相の法印」、哲學の方の極致を現はした、諸法實相、一念三千、哲理の最も深い所を說いて、而もそれは決して迂遠な教を立てたのてはない、完全なる世間、缺點なき人生を實現せんが爲に說くのてある、「我が此の法印は世間を充足す」といふことを、數ケ所に說いてある。法華一乘の教といふ意味はそこにある、日蓮が、「天晴れぬれば地明かなり、法華を識るものは世法を得べきか」と言つたのも同じ意味てある。如何に高遠なる理想を說いても、現在の世間を善導しやうとして居るのて、先づ着眼を深遠の處に置くに外ならぬ、さもないといふと何の爲に言うて居るのか、嗟、特別な宗教の中に入つて居る者に對してのみ言ふやうに思はれる、そうして釋尊の理想が了解されなくなると思ふのてある。

そこて私は佛教が世間善導の教化なることを證する材料が餘りに多いから、一ッ波斯匿王が夢を十種見た、その夢の解釋を釋尊がなさつて居ることに依つて、釋尊の御精神がどれほど人生を指導するに熱心てあつたかを玩味して見たいと思ふ。阿含二百卷の中に就て見たならば、實にさういふ問題は廣過ぎて綜合に苦しむほどてある。十種の夢が釋尊の解釋に於て實に立派な人生指導の教訓になつて居る、釋尊の御心がどんなに働いて居つたかを見る上に、頗る面白いてあらうと思ふ。釋尊の御心は世間善導の上に働いて發達し過ぎて居つたくらゐに私は考へる、人生の事などはあまり考へないといふのは、實に盲評の極てある。

こは增一阿含の終りの所に出て居るので、波斯匿王といふのは印度十六大國の一ッの王樣てありまして、佛教を後に信じたのてありますが、最初は婆羅門の信徒てある、ある時、十種の夢を一晩の中に見た、それて非常に心配をした、王妃は王樣があまり心配をするものだからして王樣に申上げた、その王妃は摩利夫人というて、なかなかの佛教信者てありまして、佛教の爲に活動をした偉い夫人てある、增一阿含の初めの佛弟子の傳に出て居るが、「あなたがソンナに一人心配をしても仕方がない、妾はあなたと夫婦てあるからあなたと憂を分たなければならぬ者てある、どんな事ても宜いから話して下さい、妾の命に換へても宜い事なら妾は決して命を惜しまぬから……」と言つたものだから、王樣が昨夜夢を

十種見たといふことを言つた、「どんな夢でありますか」と言つた所が、「一には三ッの釜があつて、眞中の釜は空ッぽであるが、兩側の釜には湯が一杯湧いて居つて、それが沸騰して溢れたのが眞中の釜に這入るかと思へば這入らないで、飛越えて向ふの釜の中に這入る、又こちらの釜も沸騰すると、眞中の釜を飛越して行つてしまふ、どうしても眞中の空ッぽの釜には湯が入らないといふ夢である。二番目の夢は馬が其處へやつて來て何か喰うて居る、口の方からも喰つて居る、尻からも喰つて居る、兩方で喰つて居る。それから三番目は大きな木に花が咲いて居る、花の咲くやうなものでないのに其處に花が咲いて居る。四には小さな苗のまだ伸びて程もないと思ふのに、それに實が生つて居る。五ッには一人の男が繩を造つて居ると、羊が後ろに隱れて居つて、造つて行く繩をボリ〳〵喰つて仕舞ふ、その男がいくら繩を造つても羊に喰はれてしまふ。六ッには狐が大威張りて立派な床の上に坐り込んで、金の器に載つて居る御馳走を平然として喰つて居る。七ッには大きな親牛が自分の子供の犢の乳を飲んで居る。八ッには黑い牛が澤山寄つて、四方から唸りながらやつて來て、大いに戰ふかと思へばさうでもない、打ッ突かりさうで打ッ突からぬ、何をしよるのかと思ふ。九ッには大きな溜池があつて、その水の眞中が濁つて周圍は澄んで居る。十には大きな瀧があつて、それが眞赤な血のやうな水になつて、その大きな瀧が繁々と流れて居る。かういふ十種の夢を見た、これは自分の身の上か、お前の身の上か、或は國民の上に非當な災難でも起るのでこんなイヤな夢を見たのであらうと思ふ」と王樣はかう言はれた。此處には說いてないけれども、外にはこれを婆羅門の者に解釋させた所が、婆羅門の者は「それはあなたの考の通り不吉な夢なんだから、到底碌な事はない、あなたが死ぬか、奥さんが死ぬか、或は戰爭が起つて負けるかするであらう」と言つて、非常に不吉な夢の如く說明したから、波斯匿王は一層心配して居つたといふことを他のお經には說いてある、此處はそれは略してある。そこで奥さんが「それはあなたがソンナ夢を見て心配して居られるけれども、心配は少し早や過ぎると思ふ、若しこゝに金を買ふたとする、それが僞物か眞金かといふことを鑑やうとするには、火で燒いてそれを石に磨つて試驗をすれば直ぐに判る。その通りにこの夢が果して吉いか凶いかといふことは、幸にお釋迦樣が近い處にお出でて居るから、これを尋ねたならば金を試驗するやうに間違なく僞物か眞金か、吉い夢か凶い夢かが分るであらう、そんなことを獨り心配なさつて居つても仕方ないから、早く釋尊の所に行つて敎を聽いたら宜からう」と言つた、そこで王樣が「大きにさうだ」といふので、共々に佛の處に參詣して、さてこの十種の夢を申上げて判斷を求めた。さて釋迦がどういふ理想に依つて十種の夢を解釋して居るか、能く味はうて見たいと思ふ。

釋尊が說かるるには、第一の三ッの釜の夢は後世の人民がみな富豪は富豪同士相助け合ふことになつて、貧困者を顧みぬ、この有樣を見たのである、金持は貧乏人を寄せつけぬ、金持は金持同士、金の餘つて居る者は金の餘つて居る者の中に入つて互ひに助け合ひ、互ひに儲け合ふから、金は金持の所にばかり寄つて、貧乏人の所には行かぬといふことになる、富豪が相提携して貧者を顧みぬといふことになつて、眞ン中の空つぽの釜には何も入らぬ、これは能く社會問題を考へて居らなければさういふ解釋は出て來ないと思ふ。それから第二の馬が口でも喰ひ、尻でも喰うて居るといふことは、これは役人の腐敗した事ぢや、大臣百官祿を官に受け、又民に食む、賄賂を取り月給を取る、即ち口からも尻からも喰うて居る、第一は富豪の不心得であり、第二は官

吏の腐敗である。第三に大きな木に花が咲いて居るといふことは人民が苦しみに堪えない、勞働に堪えない、痩せてしまつて非常に心配して居る、年齢未だ二十に足らずして頭の髪は白くなつて弱つて居るといふ、この大木に花が咲くといふのは意味が分らぬけれども、丁度芭蕉に花が咲いなら、その木が枯れるといふ、その意味なのである、終りに達したことを言つて居るのである、丁度芭蕉に花が咲いて美しいやうだけれども、直ぐ枯れてしまふ、一生懸命働いて居るけれども、その勞働の過度の爲めに遂に死んでしまふ、勞働の苦痛を認めてある。第四は小さい未だ芽生えした許りのやうな木に實が生つて居るといふのは、女が十五に滿たずして嫁いで妻となり、子を抱いて歸つて來て、さうして恥とも思うて居らぬ、早婚の弊を言うて居る、勞働の事から婦人問題に行つて居る。それから第五の繩を拵へて居るのを片つ端から羊が喰ふといふのは、夫が働いたり、軍人で遠方に行つたり、いろいろして居るのを不心得の妻が家に居つて、その儲けた金なり月給なりを使ひ、他に男を拵へて、壽司を食うたり酒を飲んだりして居る、それが繩を絢つて居るのを羊が喰ふといふ意味だと說かれた。六番目の狐が大威張りて坐り込んで、金の器に載つてある物を喰つて居るといふのは、德もなく身分もない賤しい者が威張つて、さうして今まで身分もあり、地位もあり、學問もあり、德もあつた者をボイ使つて、さうして今まで奴隸の境涯に在つた者が鞭を以てそれを叩くやうなもので、恰度露西亞の今日の有樣がそれである、階級が轉倒した有樣を狐が床の上に坐り込んで金の器のものを喰うて居ると說かれたのである。それから第七の大きな牛が犢の乳を飲んで居るといふのは、後世娘を働かして、男を持たせて、さうしてそれから錢を取つて親が左團扇で暮すのを暗示して居る、それ故に大きな牛が犢の乳を吸ふといふのである。第八には黑い牛が澤山集つて來て喧嘩するやうてしないといふことは、これは利害の關係で互ひに相爭うて、虛々實々、商業の上に、政治の上に、社會が利益を爭つて戰つて居る有樣である、その中にはもう言ふに言はれぬ複雜な事柄がある、さまざまにそれを說いて居る、その說明は非常に長い、今の世の中の利害衝突の事柄が黑い牛の群がつて居ることに譬へてある。それから九番目の大きな池の中が濁つて周圍が澄んで居るといふのは、都會から先に腐る、文明が進歩したといふ眞ん中のところに不忠の者不孝の者があつて、不道德が盛んに行はれて行き、却つて田舍は道德が頽廢をしない、それ故に池の眞ん中が濁つて、ぐるりが澄んで居る。それから第十番目の大きな瀧が眞赤に流れて居るといふことは、これは國と國とが戰さを起し、非常な戰爭をやつて流血が瀧をなして居る有樣である、互ひに相攻伐し相殺害し流血正しく赤かるべし、現在の國家の殘賊する狀態を暗示した夢である。

丁度この十種の夢を現代に持つて來るといふと、今日の文明の弊害が悉く擧つて居るやうに思はれるのである。阿含經は原始佛敎といふべきものである。そこで王樣が十の夢を見た、その十の夢を釋尊がかういふ意味に解釋したことに就て、釋尊が世間の問題、所謂今日でいへば政治の問題、文明の現象の問題に就て如何に頭を用ゐて居られたかといふ事がよく分る、これを婆羅門の所へ持つて行けば「貴方が死ぬ」とかいふやうな事を言ふ、釋尊の所へ持つて行けば文明現象に當てゝこれを解釋する、この事を以ても釋尊が世間善導に心を用ゐてお出でになつた事が分ると思ふ、多くの人が考へて居るよりも熱心であつたと考へなければならぬ、先づ着想をそこに置いて、それから釋迦の政治に對する觀念はどうかといふ事を見ないと分るまいと思ふ、それは次の十六日に自分の考を申上げて見たいと思ふ。

法華三聖に對する感想

文學博士　井上哲次郎
（文責在記者）

これと關聯して大事なことは傳教大師の出現である、傳教は早くから大乘の佛教を信じ、大いに佛教の革新を行はんとする深い考を懷かれたので、これは多くの僧侶中に於て傑出して居つた證據であります、支那に行かない前から、十九歳でありましたか、何でも若い時に叡山に上つて草庵を構へまして、さうして彼處で佛教の修行を始められた、これよりして山間佛教といふものが始めて起つた。奈良佛教は都會佛教であります、都の中にお寺がありまして、腐敗し易い弊害があつた、それで傳教大師は叡山の高い所に清淨なる草庵を結んで、彼處で佛教を研究し、又佛教の修業を致し、講義などもされたのでありますが、傳教已前には都會佛教より無かつた、傳教は實に鷄群中の一鶴で、早く叡山に上りて草庵を結んで、玆に都會の俗塵から離れて、清淨潔白なる山間に寺を建設致しました、さうしてこの山間佛教の系統を樹て始められた譯である、そこは餘程卓見である。さうして傳教と桓武天皇、この御二人の間には實に水魚の關係がありまして、この深い關係は一々御話は致しませぬ、諸君は大抵御存知でありませうが、實は桓武天皇は奈良の腐敗せる佛教は大いに革新をしなければならぬ、何とかしてこれを一掃しなげればならぬといふやうな御考があつたでありませうが、併ながら桓武天皇としてそれをなされることは容易でなかつた、けれども兎に角佛教の御信仰がお有りになつて、佛教無しには都を立て帝位にお上りになるやうなことは容易でなかつた、大變佛教の勢力の盛んな時であつたから……けれども日本の小乘の佛教や權大乘の佛教では迚もいかないやうになつて居りました、そこに傳教が丁度大乘佛教の宗旨を懷いて、早く叡山に草庵を結んで居るやうなことでありましたから、この間に關係が出來まして、どうしても將來の佛教は大乘佛教でなくてはならぬ。殊に傳教は早くから法華宗の天台の教理を慕ひまして、研究し始めたのであります、天台の書物は幾らか奈良朝の時に來て居りましたからそれ等を研究し、その教理を大いに尊崇して天台法華宗を開く考へになつた次第である、桓武天皇もやはり天台法華宗をお開きになる考であつた、故に傳教も天台法華宗は桓武天皇の開かれし所なりといふやうなことを言つて居る、天台法華宗は自分が開いたのではない、桓武天皇がお開きになつたものであると斯ういふ風に言つて居りますけれども、それは固より傳教なかりせば天台法華宗は起る筈はない、故に天台法華宗の起りましたのはこの傳教と桓武天皇と御兩人の働きの結果出來たと言うて差支ない。桓武天皇が大いに信仰なされて、いろ〳〵天台宗の起るやうにお計ひになつたのが與つて力あつた次第で、傳教一人では出來ませぬ、さうして傳教の支那に參りましたのも全く桓武天皇の思召である、桓武天皇は長く傳教の支那に滯在することを御許しにならない、早く歸つて來いといふやうなことで、傳教が支那に滯在しました期間は、實に短かつた。支那へは八ヶ月餘、往復を入れて約一年間ぐらゐのものであつた、傳教は前から天台の教理を研究することは熱心でありましたから、入唐して天台山に行きました、さう

して天台宗の教義を齎した、無論そればかりではない、禪宗だの密教などを傳へて來ましたけれども、無論天台宗が主なものである、さうして叡山を根據地として大いに天台法華宗を興隆し宣傳することに努めたのであります。

所がその努めるには斯ういふ意義がある、これが餘程注意すべき點であります、玆に面倒の起りましたのは奈良の僧侶と傳教との間に爭ひが起つて、非常な面倒なことになりました、一體傳教は奈良に於て小乘の戒を受けて居る、東大寺に於て小乘の戒を受けて居る人である、この戒を叡山に於て破棄してしまつた、さうして別に叡山に於て大乘の戒を立て戒壇を建設することを朝廷に願ひ出した、これがなか〳〵許されなかつたのであります、許されなかつた理由は朝廷に於ても直に傳教にお許しになることは難しい、奈良の僧侶の承諾を得なければ後日どんな面倒が起るかも知れぬ、奈良の僧侶が皆反對しました、そんなものを建てられては奈良の僧侶が生活に困るから、何でもかんでも反對といふので厄氣となつて反對して來ました、それで到頭傳教の生存中はその戒壇も出來ませぬでした、傳教は小乘の戒なるものは破棄してしまつたけれども、支那に於て大乘の戒はちやんと受けて居る、又日本に歸りましても華嚴からして戒牒を受けて居る、戒牒といふのは師の坊から戒名を受けて居るといふことで、支那に於ても大乘の戒を受けて歸つて來て居りますから、小乘の戒などは破棄しても何でもない、傳教に取つて小乘戒を破棄するのは何でもないが、奈良の僧侶に取つては重大な話でありましたから、苟も叡山に於て大乘の戒を行ふ戒壇などを設けられては、奈良の僧侶は立つ所がない、そこで彼等は反對を致しまして玆に爭ひが起つた、それで餘程傳教の書いたものがどうも爭ひの論が多い、その時の宗教上の爭論である、『顯戒論』を初め『守護國界章』とか樣々な書物がありますが、主なる書物は皆評論の書物で、小さな事を一々その頃は辯駁致しました、所が奈良の方にも有力な者が居りました、中々學者が居りまして得一といふのが最も有力であります、得一の書物は今日傳はりませぬけれども、傳教の書いたものや何かを見ると分りますが、最も有力なのは得一で、法相宗の學者であります、これが一番傳教に取つては手强い敵であります、他の者と同じ譯にいかぬ、そこで一々辯駁致しました、その評論が中々忙しくて、これ日も足らぬといふ有樣で、盛んに爭ひをして居る間に、戒壇も出來ず、到頭傳教は健康を損つたやうであります、中々喧嘩を始めると感情的になりますから、誰でも健康を損ふ、傳教も人であつたから大いに健康を損はれて、早く逝くなられた、逝くなつたけれども一週間もして大乘戒壇を建設することを朝廷から許されました、生存中は許されなかつたけれども、逝くなられてから僅かに一週間にして朝廷から許可されたといふことは、やはり傳教が死んで志を達したといふことになる。

そこで玆に大いに意義のあることを見なければならぬ、傳教は弘法などと餘程違ひます、傳教は我が日本の佛教界の革新者であります、どういふ風に革新したかといふと、一つの革新は奈良朝に於ける小乘若くは權大乘が、最も蔓つて非常な勢力を有つて居つた、これに對して大乘佛教を鼓吹しました、即ち天台法華宗を鼓吹しまして、どうしてもこれを興隆しなければならぬと言うて堂々と爭ひ、生存中には十分に效果を見なかつたけれども、死後その目的は達せられました、大乘佛教はこれから起りましたが、小乘といふものは榮えませぬ、奈良に小乘佛教は殘りましたけれども、又今日迄法相宗などは殘つて居ります、併ながらその奈良を外にしては至る所皆大乘佛教が榮えまして、その後日本に榮えた佛教は悉く大乘佛教である、小乘教は榮えない、日本を

して大乘佛教の國たらしめたのは實に傳教大師である。

これは初めは聖德太子の卓見であつて、大乘の經文だけをお選びになつた、その三部の經文は悉く大乘の經文であり、而も最も大切な經文を餘程巧みに太子は註解された、けれどもその後の僧侶が能くこの精神を理解しない、小乘教か然らずんば權大乘の佛教に走つて、三論宗法相宗などといふものは權大乘であります、法相宗が最も奈良朝に於ては有力であります、さういふ譯でありましたけれども、それ等は實大乘に比べれば遙かに劣るものであります、そこであゝいふ風では人類を救ふことは出來ない、又國家を救ふことは出來ないといふのが傳教の考であります。日本の國家を今日の如き窮境より救ひ出すのには、どうしても實大乘でなければならぬ、眞の大乘でなければならぬ、天台法華宗でなければならぬといふので、それで法華宗を盛んに鼓吹して、到頭日本をして大乘佛教國たらしめたといふ、そこが最も傳教の偉大な功績であります。

さうしてその上傳教は佛教を國家的ならしめた、而して且つ皇室中心主義ならしめた、即ち京都の新たなる都會に都をお遷しになつたのは桓武天皇の事業であります。新たなる都を鎮護する所の宗教はこの叡山に興りました所の天台法華宗であります、これが最も皇室と親密なる關係であつて、皇室中心主義を取つて傳教は天台法華宗を興したのであります。

さういふ風にしたのであるが、他に茲にいろ〳〵な複雜な事情がありますけれども、あとは皆略しまして、この時に注意すべきことは、もう一人茲にどうしても看過することの出來ない名僧がありました、それは弘法であります、どうしても弘法を忘れてはならない、茲に弘法との關係を見ないといけない、弘法は丁度傳教の入唐する時に同じ時に入唐致しました、傳教は桓武天皇の思召で長く居つてはいけないといふことでありまして、先刻申しましたやうに約一年間で日本に歸られた譯であります、弘法は寧ろ嵯峨帝の時に朝廷の信用を受けて大僧都にもなりましたし、皇室との關係も密接でありましたけれども、初めはさうではない、桓武天皇の時はさうではない、桓武天皇の時は傳教が最も深い關係を皇室に有つて居りました、弘法は入唐する時もそれは朝廷の許可を受けては居りまするけれども、傳教とは餘程違ふ、傳教は遣學生であります、遣學生といふのは視察に行くやうな意味であります、唯の留學生ではない、さういふやうな資格で行きましたが、弘法はさうでない、どうも全く自費で行つたかお上から留學費を支給されたか、それは分りませぬ、けれども、まあ留學生といふやうな意味であつた、さうしてこれは天台山の方に行つたのではない、唐の都長安に參りました、長安は韓退之、柳宗玄などが出ました所で、あの時代であります、あの時代に唐の都長安に這入りまして、さうして弘法は滯在日數も長く約二年間支那に居りました、足掛け三年になります、さうして傳教は唐音が出來ないから通辯を連れて參りました、唐音が出來ないから朝廷のお許しを受けて通辯を連れて行つた、所が弘法の方は唐音が出來た、中々油斷がならぬ、傳教の敵としてこれは大いに注意すべきことで、弘法は通辯なしに長安に行きまして、長く滯在致しました、さうして弘法は主に密教を研究致しました、これは專ら龍樹系統の密教を研究致しまして、さうしてうんと書物を持つて歸りました。傳教は先刻申しましたやうに天台の系統の密教を研究して來ましたが、幾らか附たりに禪宗も傳へましたけれども、主とする所は天台法華宗であつた、弘法は專ら密教を研究致しまして、さうして長く滯在して歸つて來ました、茲に傳教と弘法との間に固より知り合てはありましたが、ど

うも止むを得ぬ關係が生じた、それてその關係の一つは傳教は中々當時の名僧てありまするし、さうして朝廷との關係も深く、世間から言つても高い地位を有して居つた人に相違ありませぬけれども、密教といふ側に於ては如何にも弘法には敵はない、少し不完全てある、所が弘法は專ら密教を研究して而も長く支那に滯在し、長安の都から歸つて來たので、傳教はどうも薄氣味が惡い、天台宗の側に於ては勿論弘法に對して讓るやうなことは無いけれども、密教といふことに就てはどうも不安を感じた、自分の密教の知識の足らぬことを不安に感じまして、屢々弘法にそのことを言つて密教の書物を借りました、借つて讀んて居りました、又傳教の偉い所はあれだけの人てありながら、而も傳教の方が先輩て年齢の上から言つても、又官等の上から言つても上てあり、桓武天皇の御信任も厚いえらい名望のある方てありながら、自らへりくだつて弘法から戒を受けた、中々尋常てない、弘法は傳教から戒は受けない、傳教は弘法から戒を受けた、密教の戒を受けて居る、それまて讓遜して且つ密教の書物を屢々借りて讀みましたけれども、中々間に合はぬから自分の弟子の泰範といふ人を弘法の所にやりました、泰範といふ自分の弟子の中の錚々たる者を弘法の所にやつて、弘法に親しく就いて密教を學ばせまして、さうしてこの泰範から詳しく聽かうといふ考てあつた、所が泰範は弘法の所に參つて密教を學びましたが、傳教の所に歸つて來ない、中々歸らない、何時まて經つても歸らない、歸らないから到頭傳教は早く歸れといふことを手紙に書いて送りました、所が今度は泰範が傳教に對して堂々たる手紙を以て返事をした、私は歸らぬ、私はすつかり密教の信者になつてしまひましたから歸りませぬといふ手紙を出した、その手紙は立派な筈て弘法が代筆した、その手紙が今にも殘つて居ります、弘法大師の文集に殘つて居ります、性靈集の十卷目にちやんと殘つて居る、堂々て代筆とちやんと書いてある、それは中々立派なものてある。それて傳教も餘程困りました、困りましたが、その後泰範は歸らないても書物を借して呉れと言うて弘法に手紙をやつて、書物を借りようとしました。所が到頭、その邊から傳教と弘法の間に感情を損ふやうな事が生じて來まして、今度は借さないと言ふ、借さないといふだけならば宜いが、今度は顯教天台宗の如きものを信ずる人に、密教の眞意などが分るものてはない、詰り平たく言ふと君等の如き者に密教の眞意が分るものか、本は貸せないと言ふ返事を書いて居る、その文章は性靈集の中ても一番力のある文章てあります、學問を論じた文章としては弘法の文章中最も出色の文字てあります、堂々たる大文字てある、顯教と密教との區別がこれにはつきり說かれてある、宗派の分るゝ所がちやんと見られる、さうしましてそれて以て傳教と弘法は仲違を生じまして、これからは決して親しく交らない、別々になつてしまひました、それのみならず弘法はいろ〳〵な書物を著しました、第一弘法といふ人は傳教と違ふ、皆樣御承知の通り傳教の書物は皆漢文て書いた論評て、奈良朝の僧侶の說に對して反駁を加へたものが主なのてある、所が弘法の書いたのはさういふのはない、固より假名て書いた書物は一つもありませぬ、皆漢文てありますが、弘法の書いた書物は皆顯正的に纒めたもので、密教の教理は、元來支那に於ては組織されて居らぬ、どうも金剛智三藏系統の密教も善無畏系統の密教も組織されて居らぬ、密教の立派に組織されたものは支那には無い、それは金剛經だとかその他の密教の經文は傳はつて居りましたけれども、決して密教の組織は出來て居らぬ、弘法がそれを日本に於て組織したのてあります。

（次續）

思想問題

文化運動私見

文學士　武田顯龍

一、緒論

近頃良く文化運動と云ふ言葉を人から聞きもし自分も亦良く口にするが此の言葉が餘り廣義に用ひられる爲に此の言葉が何を意味して居るか其の內容を捕捉する事が困難であり從て文化運動と云ふ事に對する一定の概念を得ることが非常に困難である。一體今日云はれて居る文化運動とは單純な獨逸流のクルツールの運動とは異つて英米流文明開化の運動を略して文化運動と云つて居る樣に思はれるが如何に文明開化でも今日の樣に此の言葉が亂雜に用ひられては餘りに玉石混淆の度が過ぎて文化運動の內容が貧弱に成り過ぎはせぬかと懸念せられる。社會奉仕と云ふ言葉が云ひ出されると何でも彼でも社會奉仕であつて八百屋が社會奉仕の爲蔬菜廉賣仕り候と大看板を出して暮の市を賑はすのはまだ良しとしても社會奉仕の爲にルーデサック廉賣仕り候と云ふ看板を見るに至つては自分の住んでるお國は何所だつけと疑ひ度くなる。聞く處に依れば北の或る市の遊女屋仲間は社會奉仕の爲兵隊さんに限り玉代安價に大廉賣をやると云ふ決議をしたそうだが玉代の割引にも社會奉仕と云ふ形容詞をつけねば氣のすまぬ現代人がおさんどんのお尻の大きいのを小さくするのを文化運動として持て囃やすのも貴族富豪のお歴々の奥方が仰々しく集まつてお鍋どんをお鍋樣と雲間に隱るるお嬢樣並みに樣附て呼ばうと決議するのを天晴文化運動だと持て囃すのも敢て不思議ではない。勿論是等決議の動機となつてゐる人格尊重の精神は尊ぶべきだが此精神さへ雇傭者の側に溢れる程あれば何も形式の上に使傭人をお嬢樣並に樣附けて呼ばなくとも主從の間は圓滿に行くものであるが文化運動の一端として樣附けて呼ぶと決議する處に現代相が如實に現はれて居る。斯かる風潮であるから女子が修養の時間を得るのも家庭から解放せられるのも人として眞に生きる爲にも子供が餘計に在つてはいけない子供を少く產む爲に一般に避姙法を敎へて產兒を制限しなければならない產兒制限が女子を眞に生きさせる所以であり、又社會的には人口過剩を調節する所以であつて文化運動の根本だと云ふ樣な議論が出て來る。男女が一緒に寢て見の出來ぬ樣にと云ふとは御飯を食べても糞の出ぬ樣にと云ふことと同一であつて決して文化運動ではない。名を亂用すると云ふ事は其の名が持つて居る本來の意味を沒却する所以であつて斷じて許すべからざる事である。日蓮聖人が日本國の謗法は爾前の圓と法華の圓と其の體一也と云ふ義より事起ると云はれて圓體同を排し義別なりと云はれ名分を明にして純一無雜を尊ばれた事は今日我々が社會相を見るに付いても遵奉せなければならぬ羅針盤である。

二、文化運動の語義

文化とは文明開化の略語であつて文明は主として精神文明の進步發達を意味し開化は主として科學文明の進步發達を意味すると思ふ。精神文明とは即ち宗敎、倫理、道德、哲學、心理、論理等の謂であつて科學文明とは天文、地理、歴史、醫術、政治、經

濟、生理、電氣、機械等一般自然科學を此處には指すのである。此の精神文明と科學文明との區分法に就ては多小異論もあらうけれど自分は今は斯の樣に分類して置いて論を進め度いと思ふ。此の精神文明を大に進歩發達させて一方に於ては高遠崇嚴なる宗教的理想を常に把持して高邁純潔なる道德的生活を營むと共に一方に於ては殖產興業を盛にして自然力を良く利用し或は是を征服して生活を利便安固にし公正なる政治に依つて衆と共に樂むと云ふ事が文明開化であつて是を實現し實際化する處に文化運動の眞義があると信ずる。日蓮聖人の御言葉を借りて云へば時々刻々成佛の理を味ひ晝夜に淨土に往復して高遠なる宗教的理想に蓚つて眞美の生活を營むと共に主君の爲にも世の爲にも世間の心根も善かりけり善かりけりと云ふ道德的善の生活に目醒め更に押し進めて是を社會にしては諸乘一佛乘と成つて吹く風枝をならさず雨壤を不碎代は耕農の世となりて今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得人法共に不老不死の理り顯るゝ泰平愉樂の境地を現出し國としては八萬の國にも越えたる國とする處に文化運動の眞義があると信ずる。若し今日唱導せらるゝ文化運動にして單に經濟生活の安固のみを理想して高遠なる宗教的理想を沒却し或は個人の自由のみを考へて國家の秩序を忘るるが如きものあらば皆統制ある眞の文化運動とは云ひ得ないと信ずる。

三、文化運動としての民主的精神

民主主義とかデモクラッシイとか云ふ言葉は一時隨分流行したが今日では此の言葉を餘り聞きもせず又新聞雜誌等に餘り見もせないが然し民主主義の精神は文化運動と云ふ名に隱れて益々盛となり是が實際化しつゝある樣に思はれる。抑も民主主義の根本は自我に目醒むることから始まるが是が一種の體系を備へた主義主張として唱導せらるゝに至つた動機は社會組織の不均衡より權力階級富者階級が被治者階級、貧者階級に對する慘虐壓迫に對して被治者及び貧者階級の反抗思想が動機となつて表はれたものて從つて自由平等解放の考が主義の根帶をなして居ることは見易いことである。正しき意味に於ける自由平等は眞理であり然も人間必然の要求であつて是を拒斥すべき何等の理由も吾人は認めない。己に兆しを反抗的氣分に基けて起つた近代の自由平等の要求は過去に於ける其と等しく坊主が僧くけりや袈裟迄もの諺の通り自由平等の埒を脫して自由は我儘と變じ平等は無差別と變ずるは文化の爲に遺憾至極である。吾人が理想の彼岸に到達せる曉に於ては吾人の一擧手一投足皆法則と合し道に冥するが故に何を爲すも自由であるけれど未だ修養の途上に在る我等は其の行動が時に道に合する事はあるけれども時に道と反對の方向に進み又人に迷惑をかける樣なことは始終起ることであるから道を忘れて勝手な行動は出來ない。平等に就いても理想の彼岸に到達した曉は全く平等であるけれども現在修養の途上にある我等は松は綠に花は紅であつて松は松の本分を發揮し花は花の本分を發揮して行くが松と花とは形は變つて居るが各本分を發揮する點に於て平等であると同樣に大人は大人だけ中人は中人だけ小人は小人だけ各其の志を遂ぐる處に平等がある。其の形の變つて居る方から見れば差別であるが志を遂げ得る點から云へば平等である。法華經に於ては大自在と云ひ解脫と云ひ又諸乘を開して一佛乘となすと云つて人間會を說いて自由平等を說いて居るが此の自由平等は如上の意味に解すべきであつて所謂民主主義の自由平等とは異るのである。民主主義の自由平等は其の根本に於て不純の分子が混入して居り又是を實際化する時は社會の秩序を破壞して露國の如く不自由の國となり不平等の國となり飢餓と死滅より外得

られないのであるが佛教の自由平等殊に法華經の自由平等は個人としては解脱の境地に安住し國家としては歡喜と精進とに滿てる與國的國家の現出となるのであつて斯かる意味の自由平等を實際化するのが眞の文化運動であつて所謂民主主義的精神の文化運動は似而非文化運動である。

四、文化運動としての國際主義

世界大戰を一期として獨逸流の國家主義に對する呪詛の聲が英米を中心に非常に強く起り是が反動として民族連合主義更に進んで國際主義が叫ばれる樣になつて一部急進論者は此の主義を眞の文化運動として宣傳に大に努めて居る樣である。此の主義の主張點は國境を撤廢して世界が一國にならうと云ふのであるが是に就て二つある樣である、一つは單純に國境を撤廢して基督教流の世界同胞主義を採つて行くのと今一つは世界組合主義とも云ふべきものて國の何れを問はず職業別に依つて組合を作り組合の利益の爲には所屬國の不利益になることでも敢て行ふと云ふのである。今日此の組合主義が或る程度迄進んで居るのは勞働者の團體であつて米國を中心とする勞働者の團體は組合員を世界各國に有して居る樣な工合で日本の友愛會なども加盟するとか、したとか云ふ噂はほんの昨年の事であつた。勞農露國の赤化運動の大宣傳は實に精神は此の變形であつて世界を擧げて全部勞働者の天下となさう、世界の資本家階級權力者階級を全部覆がへさうと云ふ運動であつて一種の國際主義と云ふことが出來る。國際聯盟の精神は前述の意味とは異るけれども矢張り從來重んじた國境を輕視して國際的に總てを行ひ總てを解決して行かうと云ふ意味で從來の國家主義とは餘程異つて居る。自分は勿論頑固な國家主義者でないから國際關係世界同胞主義には多大の同情を有つて居る然し如何に世界各國の人を同胞として又憐なる者として是を救濟する責務を持つて居ると思つても自分は常に自分が日本人であると云ふことを忘れることは出來ない。人間が自分の子と他人の子と同樣の程度に愛し得ない限り、自分の親と他人の親と同樣の程度に尊敬し得ない限り、自分の妻と他人の妻と同樣の程度に愛し得ない限り自分の家庭を全く忘れ得ない限りは決して國を忘れ得べきものでなく又從つて同胞主義の實行せらるべきものではない。世界組合主義を最も盛に唱導しつゝあるは勞働者階級だが勞働者の中に於て米國の勞働者と日本移民の勞働者との利害衝突は現に國際主義の本場である米國に於て移民問題として吾人に苦痛を與へつつあるではないか。又國際聯盟を主張し同胞主義の精神を鼓吹しつゝある反面に於て人種平等案が否決せらるる現狀ではないか何處に眞の同胞主義組合主義が實現せられ得ようか。

抑も國家は各其の特失と歴史等を異にして居るのであつて國家と云ふ團結の力に依つて其の特長を益々顯著にして發揮し合ふ處に人類の文化がある。然も世界全體が爭鬪に依らずして調和に據りて御互に採長補短し合ふ處に人類の文化が進歩するのであつて國家は人類文化の進歩に對して必然的に存在すべきものなることはヘーゲルと共に斷言して憚らない。勿論經濟上原料と生產品と彼此相ひ通じて彼の無き物は我是を送り我に無き物は彼に需めて國際的に相ひ補ふべきは人類共存の目的より見て論無き處であるが斯の如き理論は國境を撤廢すべき理由とならないことは一國内に在つて商工農等職業が異つて、物資をお互に供給し合ふからと云つて直に家庭の埒を撤して一國壹千萬餘戸の家庭が一家族になる必要のないのと同樣である。

我々が家庭生活を營むことに依つて眞に人間を味ひ人間として生き得ると同樣に國家生活を營むこと

に依つて眞に人間として生き得るのである。從て我等に取つて大切なるは家庭である。家庭の安固を得るは又生命財産の安固を得るは統制ある國家に依つて初て期待し得らるゝのであるから先づ國家の隆盛ならんことを期せねばならぬ。日蓮聖人が知法思國と云ふ一切の大事の中に國の亡ぶるは第一の大事なりと云はれ又汝一身の安堵を思はば先づ四海の靜謐を祈るべしと云はれたことは吾人大に心肝に徹して銘すべきであつて斯の如き日蓮聖人の態度に出るのが眞の文化運動であらねばならぬ徒に國を忘れ君を忘れ一切を忘れて急進的な國際主義の如きに獲はれ自ら高しとして誇るが如きは笑ふべきの態度であつて文化運動に對する反逆者である須く穩健中正なる然も公正なる理想を有する國本中心主義で進まねばならぬ。

記事

各地の思想戰

◎名古屋教壇　一月八日夜、妙敎婦人會新年會、「戊年の話」廣瀨農學士、「本門の本尊」國友文學士。講演後竹本染之助氏の餘興義太夫「日蓮記」あり、又參詣者一同に甘酒を饗す法悅の裡に新年と共に本會發展の模擬成れるを示すものありき。△同九日夜櫛崎宅講演會、廣瀨農學士出演、△同日夜刈谷町長遠寺に於て「人の本性」國友文學士、△同十八日夜相澤宅講演會。廣瀨農學士出演、△二月八日夜、妙敎婦人會例會「十界互具に就て」國友文學士、△同日夜刈谷町長遠寺に於て、清水一乘師出演。

◎品川活動史　一月十二日午後二時、於妙國寺正法護持會、本多大僧正の講演。△十五日午後七時於妙蓮寺、青年立志會春季大會「道德の綱領」高木代議士、「文明の啓發」笹川僧正講演。△十六日午後二時於本榮寺、商工員慰安會、「大正講談」三遊樂堂氏。△十六日午後七時於本榮寺、講演會、「日蓮と國旗」藤江甫氏、「心の力」高木日靖師「帝國々民の自覺」小原隨軍少將。△十八日午後二時於妙蓮寺、交信會、笹川僧正の講演。△二十二日午後七時於妙蓮寺、思想問題講演會、「理想と實際」池田時護士、「世界的日本帝國の責任」長島代議士、「日蓮と太平洋」高木代議士、「社會主義の病弊と興國の基本」笹川僧正。△二十七日午後七時於本光寺、立正安國講演會「帝國の使命」佐々木代議士、「日蓮主義より見たる華府會議及國民の自覺」野口權大僧正。旭光照波新年の敎壇を彩れり。

◎千葉縣　山武郡土氣小學校に於て、二月五日午後一時より、文化振興講演會を開催、聽衆約六百名、非常の盛況にて參聽者一同感激と滿足を表せり。「開會の主旨」土屋校長。「米國十九年滯在の感想」矢部政雄。「國民思想と風紀」笹川僧正。斯會の盛況と參聽者の滿足は從來布敎不用無爲を唱へたる無道念者に對する活ける敎範にして、熱誠と奮勵とを以てすれば必らず反響ある證據となれり。山武郡前之內村常覺寺に於て、一月一日午後一時より前之內區新年會開催、「日本國民の覺悟」中島元道師、△同九日夜「日蓮聖人傳」中島元道師、△同十二日夜青年會例會、「佛敎概論」中島元道師、△同十五日夜子安講「胎敎」中島元道師、△同十八日午後一時より題目講「如說修行」中島元道師。

第三敎區寺院敎團活動　一月八日長柄村廣福寺に於て例會開催、栗原、秋葉、木村、山本、河野、長岡、宇津木、竹內、黑須、岡元の各師參席、祖書研究、役員の改選を行ひ、毎月茂原市場布敎の日時等を協定したり。△同十四日茂原町市場に於て降雪紛紛たる道路に立ちて日蓮主義宣傳に對手の聽衆を感泣せしめたり。△同廿日國府關法泉寺にて秋葉日敎、長岡育應兩師の講演。△同廿一日眞名敎老會にて秋葉日敎師の講演あり。

◎金澤敎況　一月二十二日「本尊に就て」本郷貫次郎氏、「不確實なる人生」宮田純榮師、聽者參拾餘名。△二十八日天晴會「法華經概觀」宮田純榮師、「五濁と開導」小島由之助氏、「念佛無間論」石橋會章師、聽衆六十餘名。△二十七日笹川氏宅、法華題目鈔講話宮田純榮師、聽衆三十二名。寫眞宗の七百年紀念運動に對抗すべき活運動の畫策せられつゝあり、遠からず何らかの形によつて現はるゝに至らん。

◎岡山縣和氣町　一月元旦午前七時本成寺にて國禱會、△四日夜柴山宅にて「神人合致」原田日勇、△十五日婦人會、餘興福引、「年始人生觀」原田日勇、△十六日夜同信會「佛神の敎光」原田日勇、△廿八日天滿修養會、公會堂に於て、「同會之辭」藤原團長、「都會と田舍」滋野代二、「七福神之由來」原田日勇。

◎久留米敎況　十二月十二日於本泰寺同信會、△十六日地明會「佛敎信仰の性質及び其內容」中原師、△十七日天晴會講演「統一の思想」永田氏、「近代思想と法華經」中原法學士「法華經要義」中原山主、△十九日於柳田龍宅「正しき佛敎觀」中原師、△二十七日於川上宅「佛敎信仰の性質及活現」中原師、△因に記す、本多稅下國友僧正の御宣敎に依り反響長大なるものあり、堅實なる士女の天晴會及び地明會に入會申込者漸〳〵加はり、會員亦宣傳に力を效さんする純誠の士を見るは法國の爲め慶ぶべき現象といふべし。

◎大阪地方　十一月二十六日堺妙滿寺にて日經上人三百遠忌併て法王寺合併大法要を慶修、左の講演をなす。「同會の辭」京藤義應、「衛生と信仰」萩原僧正、「眞の解說と法華經」本多稅下。さしもに廣き本堂も立錐の餘地なく、頗る盛會を極め聽衆に多大の感動を與へられたり。△一月十二日大阪堂開寺にて「年頭の感」京藤義應△一月二十一日同所「開會の辭」京藤義應、「熱心と成功」有田宏

道、「五果に就て」武田文學士、「日蓮が弟子檀那」山根監督布教師
此日寒氣嚴烈の折にもかゝはらず、熱心なる求道の士多數來聽多大
の效果を奏したり。△一月二十四日平山宅にて「因果論」京藤義應、
△同二十八日山川宅にて「本佛と吾等」京藤義應。

◎豐橋地方　△十二月十一日妙眞寺少年會「講話」加藤少將、
「お伽噺」大竹直治、「因果お伽噺」野澤少將。△同夜統一閣主催、
思想問題大講演、「開會の辭」細谷市長、「現代思想の解剖」野澤少
將。△十二日神谷繁二鈴木邦太郎間瀬校長發起泉村小學校に開催、
「開會の辭」間瀬校長、「思想の調整」野澤少將。△同夜「思想問題
の歸結」野澤少將。△十三日福江小學校に於て「軍備問題に就て」
加藤少將、「思想問題大觀」野澤少將。△十四日野田村小學校に於
て同校生徒の爲に、野澤少將講演。△午後二時より在鄕軍人青年會
の爲に「軍備問題に就て」加藤少將、「思想問題大觀」野澤少將。
△同夜法華寺に於て「開會の辭」松本堅晴、「國體の精華」加藤少
將、「思想問題と日蓮主義」野澤少將。△十五日東濱名村公會堂に
於て、「開會の辭」豐田通泰、「思想法樣の標準」野澤少將。△十六
日朝、濱名小學校生徒の爲に、野澤少將講演。△同夜、白須賀町妙
泰寺に於て、明治天皇十遠年記修次で講演「開會の辭」高橋道碩、
「生活と信仰」山本布教師、「思想問題の歸趣」野澤少將。各地共聽
衆滿堂多大の感動を與ふ。

統一閣法戰錄

△一月五日統一閣新年宴會、午後一時國禮會、同二時宴會（歌留あ
り）、來會者貳百名。△同二十二日曜講演「南無の生活」秋山乾
英師、「人の情」安田台城師、「國史と日蓮上人」笹川日堂師、「聖
訓摘要」本多稅下。△同二十三日地明婦人會「聖書要文講義」本多
稅下。△同二十八日土曜講義「法華經講義」井村日成師、「撰時抄」
木村日保師。△二十九日日曜講演「宗教の本質」吉井光君、「旭光照
波」高木日靖師「聖訓摘要」本多稅下。△二月八日日曜講演「人生
と宗教」長谷川義一師「立正安國と華府會議」野口日主師、「年頭
の所感」本多稅下。△同十五日日曜講演「救世護國の偉人」森川泰
修師、「日蓮主義の三大課題」關田日城師、「聖訓摘要」本多稅下。
△同十六日自慶會慰安大會「眞の幸福とは何ぞ」安田台城師、「何
を賀むべきか」本多稅下。餘興「二番せんじ」（落語）橘家圓窓、「日
蓮記」（琵琶）鬼頭昇玉、「義士傳」（講談）桃川如燕。△同二十一日土
曜講義、「撰時抄講義」木村日保師、「日蓮主義綱要」井村日成師。

第五部監督布教

大正拾一年一月十九日夜行西下。一月廿日午前大阪着、午後堺妙
深寺視察。
同廿日夜大阪蓮成寺講演。「開會の辭」寺主　上田智景、「修養の根
本義」隨行　有田宏道、「住淨善地」主任　山根日東。
寒氣嚴烈聽衆僅かに五十餘人に過ぎざりしも所謂一粒種にて住職
平素の勉勵を認めらる。
同廿一日午後郡山常光寺視察。
同夜大阪堂圓寺講演。「開會の辭」寺主　京藤義應、「熱心と成功」
隨行　有田宏道、「五果に就て」同　武田顯龍、「日蓮が弟子旦那」
主任　山根日東。
寒氣一層嚴烈聽衆僅かに四十余人に過ぎざりしも、熱心聞法住職
平素の調育を忍ばしむ。
同廿二日午後一時耳原法華寺講演。「開會の辭」管事　上田智景、
「人生と日蓮主義」隨行　有田宏道、「六度に就て」同　武田顯龍、
「聞法より修習へ」主任　山根日東
不意の開催にも顧らず聽衆萬堂（百余名）熱心に聞法せり、住職等
名玄僧の三十年間の努力の結果なり、自今一層發展を希望し置き
たり、心地よき限りなり。
同日夜總本山妙滿寺講堂。「開會の辭」本山部長　萩原日道、「懺悔
滅罪に就て」隨行　武田顯龍、「日蓮が弟子旦那」主任　山根日東。
聽衆約壹百異狀なし。
同廿三日午後二時寂光寺講演。「開會の辭」布教師　金光孝碩、「菩
薩の願行」隨行　武田顯龍、「救ひの御手」主任　山根日東。
聽衆五十余熱心傾聽せり。新旦二戸、是替全部寄附行爲にて出來
上りすが〳〵しき心地せり。
同日夜妙祐久遠寺講演。「開會の辭」布教師　金光孝碩、「完竟は一
信より」隨行　武田顯龍、「生活の淨化」主任　山根日東。
聽衆六十余熱心聽法せり。寺觀善美を呈し、住職等相當努力の痕
を認めたり。即夜行歸京。

巡回教化

一月十六日午後一時東京市立高年小學校に於て、
兒童保護者の祖先祭を擧行す、當日會する者約七百
名、文學士武田顯龍師專ら幹旋の勞を採られ、同校
長今井悅藏氏及び笹川僧正の講演あり、參會者何れ
も感激と歡喜とに充ち、多大の功果を收めたり、當
日法要に參加せし僧員左の如し。
笹川僧正、武田文學士、大森日榮師、高木日靖
師、森田會由師、木內照準師。
一月二十五日午後七時、大井町於金龍館、「報國至
誠」、岡田鎭吉氏、「日本民族の特性」高木日靖師、「國
家的回向」笹川僧正、餘興「大正講談」三浦樂堂氏。

廣告

編素を論ぜず日蓮主義の宣傳に熱心にして
能辯且大聲而も酒色を欲せず謹嚴實なる御
人數位を高給にて招聘す（至急履歷書御送附
あれ）締切參月十五日（委細書面應酬）。
京都市諏訪町松原上ル
日蓮主義宣傳活動寫眞株式會社

寺院開放

顯本法華宗社會部

東京市に來往する地方本宗檀信徒及び所縁者の爲に、實費宿泊所として左記東京寺院を開放す。實費宿泊料は一宿金壹圓五拾錢とす地方寺院住職の紹介を要す。

東京寺院

淺草區北清島町（停留場附近）	同 谷中初音町	本授寺	市外巢鴨町染井 蓮華寺
同 吉野町（停留場裏通）	統一閣	本郷區駒込蓬莱町（肴町停留場）	市外高田町雜司ヶ谷 本敎寺
同	圓常寺	小石川區原町（指ヶ谷町停留場）	顯本寺 右同所 寛受院
同	（同）	本念寺	市外品川町南品川（青物横丁停留場）
同 新谷町（十二階裏）	常圓寺	赤坂區一本木町（赤坂見附停留場）	妙國寺 右同所 眞了院
	善仙院	牛込區原町（柳町停留場）	常玄寺 市外品川町（諸鳥場停留場側）
同 南松山町（菊屋樓停留場）	常樂寺	右同所	妙蓮寺 本光寺
	法成寺	同 早稻田南寺町（早稻田終點）	右同所 本榮寺
同 永住町（北清島町停留場）	妙經寺	四谷區南寺町（鹽町停留場）	正法寺 右同所 清光院
下谷區池ノ端七軒町	妙顯寺	法恩寺	市外入新井町（大森停車場約五丁池上道） 善慶寺

寺院開放

顯本法華宗社會部

時代に鑑み左記方法に依り、日蓮主義者の爲に、名古屋市本宗寺院を開放す。

一、名古屋市に來往する人の爲に宿舍として常德寺靈山寺を提供す。

一、名古屋市に滯在する人の爲に宿泊所として法道寺を提供す。

右各項共に朝は自炊又は食堂に於て便ぜられたし

一、名古屋市に在學する學生の爲に常德寺法道寺内に監督寄宿舍「龍淵塾」を設置す。

在塾生は朝夕の勤行を怠らず及び日蓮主義宣揚に應分の任務に從ふ者とす。

一、講演會場として常德寺靈山寺妙行寺を開放す、

名古屋市寺院

中區新榮町四丁目	常德寺	同 區八百屋町三丁目	妙行寺、
同 區古渡町五丁目	靈山寺	東區田代町	法道寺

新寺建立淨財勸募

愛知縣北設樂郡上津具村本常寺

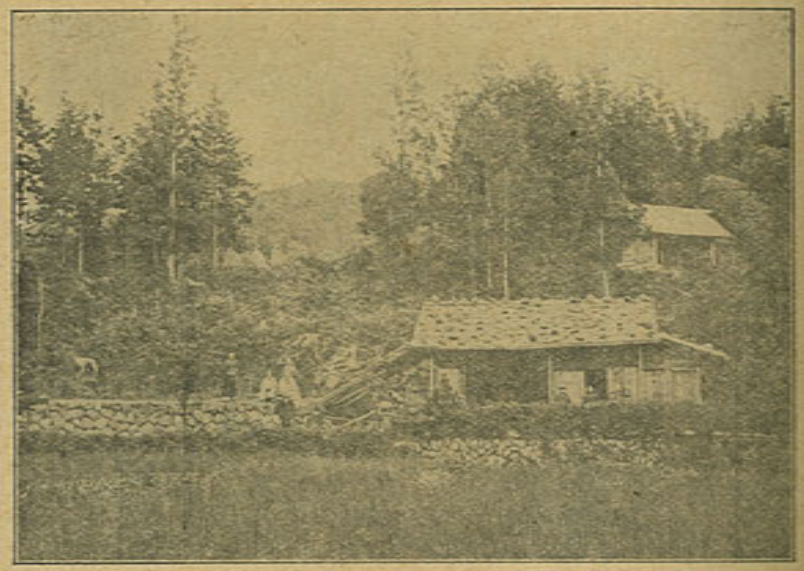
廣告

本成寺建立募緣序

宗教の人生に必要なるは事理頗る明白にして誰か復疑を存せんや個人に就て之を見れば人格を向上し精神の不安を除去し以て苦と罪とを解脫せしむ又家庭に就て之を見れば家憲の中軸と成り祖先精靈の常在を信じ以て家庭の生命を尊重せしむ復社會に就て之を見れば信義の風敦厚の俗を維持し以て謙讓の美德を發達せしむ更に國家に就て之を見れば我が國體の尊嚴を信解し忠君愛國の道德を助長し以て犧牲の大精神を涵養せしむ加之宗教は各人生命の永存を敎へて不滅の信仰に立たしむるが故に一切の思想行爲の根本に光と力とを與へ愉悅の生活を拓開し來り縱し物質的には不遇薄命に坐することあるも精神界に國家を建設し所謂一步を行かずして靈山に往復するを得ん斯くて數へ來らば宗教の効果は眞に廣大無邊なり然して各種宗教中最も完全にして且つ尊高なるは佛教に過ぎたるは無し其佛教中に於て最第一たるは實に法華經なり故に曾て聖德太子は

新寺建立淨財勸募

愛知縣北設樂郡上津具村本常寺



本常寺建設敷地圖

之を撰んで鎭護國家の妙典と稱し傳敎大師は之を以て南都六宗を統一し朝野の間法華經の尊信は遙に群典に超へたり日蓮大聖人出づるに及んで更に法華經の心髓を發揮し世界第一の妙宗を創立す之を顯本法華の大敎と稱す

茲に如上宗敎の必要を自覺し殊に顯本法華の大敎を尊信する士女胥謀り三河國北設樂郡上津具村の內淸淨の地域を撰んで一寺を建立し之を圓珠山本常寺と稱す此寺は顯本法華の大敎を宣布する道場なれば上は佛祖の常護を蒙むり下は遠・近に法益を流布し由て以て廣大無邊の効果を奏せんこと疑なし予此

法華經要文講義

本多日生

これより『法華經要文講義』と題して、法華經並に開結二經の中から重要なる經文を摘出して、その旨致を講述することに致します。開結二經は法華經に附屬して居るので、日蓮上人の平生お持ちになつたのも開結を加へての十卷の經文であります。

無量義經

無量義經に關しては傳教大師の『註無量義經』といふ解釋書が現存して居るので、それが洵に能く整うて居ると思ひます、それ故に詳しく無量義經全體に亘つて研究せんとせば、先づ『註無量義經』を讀まねばならぬのでありますが、今は要文を摘出してその大體を講ずるに過ぎないのであります。無量義經は一卷でそれが三品に分れて居る、即ち第一が德行品、第二が說法品、第三が十功德品であります。

德行品第一

第一の德行品は如何なる事が說いてあるかと言へば、羅漢と菩薩と佛との三つの聖者に關してその德行が擧つて居るのである。羅漢の聖者はどういふ德

を備へて居るかと言へば、それは所謂煩惱を斷じて小乘の涅槃の覺に上つて、人生の苦悶罪惡を解脫して居る、その羅漢の德が遙べられて居るのてある。今茲に摘出する所は菩薩の德と佛の德に限つて擧げたのて、即ち一、二の符號の下は菩薩の德てあり、三の符號の下が佛の德を敷じたのてある。

一、涅槃の門を開き、解脫の風を扇いて、世の惱熱を除き、法の清涼を致す。

菩薩の德の中に最も尊といのは、涅槃の門を開き、解脫の風を扇いて世の惱熱を除き、法の清涼を致すといふ作用をなさる點て、唯だ自己の苦悶と罪惡とを免かれる獨善的の修行てはなくして、利他の行に立つて多くの苦める者、罪ある者を濟度する爲に働かれるのてある。而もその救濟は皮相の生活の問題とか、社會問題とかいふことてはなくして、精神の根柢に入つて之を救ふのてある。現在の文明は精神の救濟より物質の救濟を重しと論じて居るけれども、それが大きな間違ひてあつて、無論物質的救濟は大切には相違ないけれども、精神的救濟を捨てゝ物質的救濟のみに走れば、假にその目的を達したとしても人の苦痛と罪惡とは除かれるものてはない、決して眞の幸福を來たすことは出來ない。精神的の救濟に依つて各自の苦悶と罪惡とを除いて、人格を造つてかゝらなければ、單に生活の問題のみを重しとして總ての施設をやつても、人格が墮落を始める、墮落したる者の集りはそこに物質の救濟すらも全うすることが出來なくなつて、一も取らず二も取らず、總てが失敗に歸するのてある、今の文明の陷りつゝある失敗は即ちそれてある。假にその目標に向つて目的が達せられても、決して眞の幸福はない、又その目的は決して達せられないものてある、却つて爭鬪、掠奪、破壞、暗黑といふことになつて、人類の幸福が全滅される譯てある。それ故に淺薄なる思想家は佛敎に說く菩薩の修行などを古きことにして廢るけれども、それは如何にも暗愚なることてあらうと思ふ。精神的の救濟は難かしいやうてあるけれども、人格を向上せしめたならば、その崇高なる人格者が世に殖えて、所謂政治家となり敎育者となり社會の經綸に當つて行くならば、さうして又富豪の中にも或は細民の中にも、その崇高なる德風が及び、宗敎の信仰が燃えるならば、必ずや物質の方にも完全なる施設が行はれて、左程に難かしいことてなくなるのてある。今のやり方ては社會政策とか物質問題とかいふものが、議論のみ多くしてその實行が困難になつて來る、困難どころてはない、それが失敗に歸するやうになる、人格を向上せしむることを忘れての經綸經營は、全部暗愚なものてあるといふことが斷言されると信ずるのてあります。

菩薩は斯樣な暗愚な態度に出ない、無論菩薩の作用の中には、物質的の方面をも忘れるものてはない、併し一番重きを置くのは精神的救濟てある。それ故に「涅槃の門を開き、解脫の風を扇いて」といふのて、涅槃の門といふは唯今申す苦悶と罪惡とを打消すのを涅槃の門といふのてある、解脫といふ事もやはり苦悶と罪惡より脫して眞の幸福を味はひ、眞に道德を樂む人となるのが、解脫の風といふことてある。即ち精神的の救濟に依つて人格を向上せしめ、奈何なる事に出會つても、煩悶、苦痛を起さない人となり、奈何なる場合に處しても、罪惡に墮ち行かない人となつて、そこに法悅に活き、功德善根を積

び人となつて行く。それ故に「世の惱熱を除く」と言つて、この世の中の四苦八苦と稱する、或は病に罹るとか、年を老るとか、死ぬるとか、求めて得ざるとかいふ樣な、種々なる意の如くならぬ人生の缺陷に遭遇しても、そこに惱みを起すことが無くなる。元來人生は左樣な缺陷のあるべきものだと自覺して、より高き希望に活きて行くからして、世の惱熱が禍をなさないので、その惱熱を除く事が出來る。さうして「法の清涼を致す」て、外部の風に依つて肉體の涼しさを感ずるのてはなくして、無形の精神的の風を受けて、さうして心の中がスガ〳〵して、苦悶と罪惡の惱熱を吹き拂ふ事が出來るのてある。この法の清涼といふことは、法悅といふよりも尙ほ意味が廣いやうに思はれるので、それは佛敎ては悅び以上の事が說いてある、苦むとか樂しむとか、或は悅ぶといふことは相對的てあるが、非苦非樂の境界がある、悅ぶといふことてあると、又そこに悅びを失ふことが起つて來るけれども、非苦非樂を味はふ人は、所謂「心廣うして體泞かなり」といふが如くに、それが樂みだと言へば樂みてはあるけれども、往くとして可ならざるなきものてある、種々なる困難に遭遇して鬪ひつゝ、そこに滿足があるのてある、非常な失意の境遇に處して、而も安心を失はぬのてある。それ故世俗にいふやうな、悅びとは違ふ、牡丹餅の嗜きな者が牡丹餅を食つたとか、ビールの好きな者がビールを飲んだとかいふやうな意味てはなくして、往くとして可ならざるなき境遇を、法の清涼を致すと言ふのてある、その味ひや曰く言ひ難きものてあつて、その境遇に達したる者が、初めて之れを實感することが出來るのてあります。これを無畏の境界と申して居るが、何等畏れ無き境界てあつて、奈何なる事に處しても精神の平和安定を破られない、死の刹那に於ても尙ほ且つそこに光を認めて、進んて行くのてありますから、非常な徹底したる精神の力を言ひ現はして居る言葉てあります。

これが菩薩の德を言ひ現はす言葉として、意味も深いし且つ整うて居ると思ふのは、この涅槃とか解脫とかいふ崇高なる宗敎の信念を與へて、それが死後の悅びてなくして世の惱熱を除くのてある、さうしてその除かれた精神の狀態は、今申す非常に徹底したる法の清涼に進んて、何時ても精神の幸福を感じて行くのてあつて、畏れ無き境界に達せしむるのてある。日蓮聖人の如きは實にその摸範者てあつて、非常なる場合に處しても、この悅びを失はず、平和を失はずして居てになつた、最後池上入滅に至るその刹那まて、この法の清涼を維持されたのてあります。菩薩は人々をしてさういふ幸福なる境界に上さうとして努力して居る者てあると言つて、その德が頌讃されて居るのてある。斯樣にその德を讃歎することは、又大乘を學ぶ者をして、同じくその德に感孚せしめやうとするのてあつて、菩薩の德を說くことが、後來大乘を學ぶ者をしてこれに倣はしめやうとするのてあり、それが敎となる譯てあります。

二、爾して乃ち洪に無上の大乘を注いて衆生の諸有の善根を潤漬し、善の種子を布いて功德の田に遍し、普く一切をして菩提の萌を發せしむ。智慧の日月、方便の時節、大乘の事業を扶疏增長して、衆をして疾く阿耨多羅三藐三

菩提を成じ、常住の快樂微妙眞實に、無量の大悲苦の衆生を救はしむ。

これも同じく菩薩の德を談じたのであるが、更にその意味を擴げて示されて居る、菩薩の作用は前にもいふやうに獨善的ではなくして、多くの衆生を濟度するにあるからして、その濟度の方法は「洪に無上の大乘を注いて」と言つて、佛敎の中の大乘の敎を與へることに努力する。大乘を注ぐといふのは雨に譬へたが故に、大乘の雨が降つて小さな草も大きな木もその濕ひを得て發育するが如くに、衆生の佛性の芽が大乘の敎の雨を受けて發育するといふのである。菩薩は左樣にして衆生のあらゆる善根を潤し濕す、その根元は佛性であるが、それが芽を吹けば菩薩行を起す人となり、その菩薩行の中に樣々なる善根が行はれるといふのである。その諸々の善根といふのは、主として五つを數へて居る、即ち信根、念根、精進根、定根、慧根、この五つが發して種々無量の善根を起す譯である。その衆生の心の田地に對して善の種子を蒔いて功德の田に逼ねくする、一切衆生は本來德を發生すべき善き田地を有つて居る、即ち儒敎で言つても「仁義禮智、心に根す」といつて居るが、それは即ち善根である。儒者は善根功德と言へば佛敎でのみいふやうに思うて居るけれども、儒敎にもやはり善根といふ言葉がある譯なのである、心に善の根があつてそれから芽を吹いて來る、故に衆生の心を功德の田に比し、その中に有つて居る道德性を善根と稱して居る。その人々の功德の田に逼ねく法雨を降らしてその發生を促す「普く一切をして菩提の芽を發せしめ」――その善根を小さな目的に置かずして、無上菩提を成就する所の芽を發せしめるのである。菩提と言へば完全なる覺を意味して居るので、佛樣に成らうとする考へである、その佛とは本來有つて居る無限の智慧と慈悲と活動とを遺憾なく發揮し、生命に於ても無限の境界に住することをいふのである。その無上の覺に達せんが爲には菩薩の行を起さなければならぬから、そこには「下衆生を敎化する」と言つて樣々なる救濟の活動を起すのである、上には佛に成らうとする希望を持ち、下には迷へる者を救ふ活動を起して行くのが、菩提の芽を發するといふことである。その芽を成長して行く爲には智慧の日月、方便の時節を了解して居るべきで、唯だ菩提の芽は發育するものではない、妄信では佛敎の菩提の芽は成育しないことを知つて、智慧の方面を磨いて、正しき意識の發達を心懸け、宇宙を認める上にも自己を認める上にも佛を認める上にも、正しい意識信仰が發達をしなければ、恰も草木が日月の光を受けない時、發育しないが如くである。菩提の芽は斯樣な正しい智慧を日月の光の如くに感じて行くので、この智慧がなければ草木が日月の光を得ずして枯れ行くが如きものだといふことを菩薩は知つて居るのである。今一つは方便といふ事で、正しい智慧があつても、それを應用する所の適當な方法を知らなければ、恰も種子を蒔くのに日月の光さへあれば物が育つと思うて、秋の頃に米を蒔くやうなもので、少しばかり芽が伸びかけても實は結ばずに枯れてしまふ、その衆生の機根に對し、又時代に應じ、或はその國の事情に依つて、日蓮の叫びし所謂敎、機、時、國、序の次第を知つて、その應用を過たぬやうにすること、恰も種を播くに時節を知らなければならぬが如きものであるといふこ

とを菩薩は了解して居る。左樣な智慧と方便、この完全なる作用の下に「大乘の事業を扶蔬增長して」行くのである、「大乘の事業」とは衆生を救濟するのであるが、その救濟は無論精神的物質的兩方面に亘つてやるのであるけれども、主なるものは精神の方面である。之を施の上に就いては財施、法施、無畏施と言はれて居る、財施といふは物質的の救濟であり、法施といふは精神的の救濟である、無畏施といふのはその精神的救濟が宗教の意味に於て徹底して居ることとて、前にいふ通り奈何なる事に出會うても精神の安定を破らない樣な、深い强い信念に立たしめるのを無畏施といふのである。現代の文明は財施を以て社會救濟として之を重んじ、法施の如きを輕く視て居る、假に法施を重しと視るにしても、それが徹底しないからして、無畏施の一つは全然忘れ去らんとするが如き有樣である、菩薩は左樣な暗愚なことはやらぬから、智慧の日月の中にその意味を能く了解して、無論人を救ふには物質の方面と普通にいふ精神の方面と、更に徹底したる宗教の安心立命と、この三つを並び行うて救濟の事業を全うすることが、大乘の事業を扶蔬增長するといふのである。さうして結局は現在の生活の安定ばかりでなくして、人は皆無常の生命を有つて居るので、肉身は滅び去るが故に、何時肉身が滅びるにしても、その者の不滅の生命は無上の菩提を成就して、その結果は「常住の快樂微妙眞實に」て、滅びない樂みと、何とも言ひ得られない覺の眞實の幸福に立たしめる、即ち佛樣に成つて自分が幸福を味はうのみでなく、その佛の活動が更に「無量の大悲」となつて現はれ、又〳〵苦める衆生を救濟する所の作用に就くのである、

その本人は常住の快樂、微妙眞實の境界に住し、その人の活動が又〳〵多くの者を救ふ作用に就かしめやうとして、菩薩は活動をするものである、それが菩薩の德だと說いてあるのであります。

これも日蓮聖人に於てその模範を見ることが出來るので、法華經の敎を宣傳して人〳〵の善根の心を促がして、菩提の萠を吹かしめ、而して智慧の日月、方便の時節に就ては、日蓮聖人の主義主張が洵にその範を示して居るので、他の多くの佛敎徒の如きは、その智慧と方便との上に於て、多大の缺陷を有つて居るが故に、佛敎が萎靡振はざるやうになつたのである。日本の佛敎が今日のやうな狀態に居るのは、確かに敎としては法華經を表に立てない爲めである、模範者としては日蓮の如き人を崇拜しなかつた爲に起つたこととて、日本佛敎が總ての載著を捨て、いろ〳〵な情實を脫して、法華經に戻り日蓮を仰ぐに至つたならば、確かに佛敎の中より菩薩行の偉大なる活動を發揮することが出來るのである。大體淨土門の如きは菩薩といふやうな言葉に出會つても、腰を拔かす程に低級なる考になつて居る、禪宗は菩薩といふ言葉くらゐは殘つて居るが、これは非常に虛無恬淡に流れて居る、さうして救濟の熱烈なる活動を忘れて、氣の拔けたやうな敎を立てた。眞言は菩薩精神の幾分は保存したけれども、餘りに事相といふことに流れ、加持祈禱のやうな事に重きを置いて、或は不思議な樣な事をやる、所謂婆羅門的の思想が餘りに多量に混つて、佛敎の正統思想が隱れてしまつて居るのである。聖德太子の見たる佛敎、傳敎大師の見たる佛敎のやうな思想、又日蓮の發揮したやうな點を表に出して日本に發達させて來たなら

ば、非常に國家の爲にも良かつたてあらうし、佛教も聲價を失墜することはなかつたてあらう、遺憾なことは淨土門や禪宗や眞言のやうな傍系的佛教が、多數を占るに至つて、爲に日本の文明を混雜せしめ、佛教自身も衰ふるに至つたのは、如何にも遺憾至極の事てあります。

三、大なる哉大悟大聖主、垢無く染無く所著無き、天人象馬の調御師、道風德香一切に薫じ、示して丈六紫金の暉を爲し、方整照曜として甚だ明徹なり。

この文は佛の德に就て歎じたのてありますが、これは經文には非常に詳しく說かれて居るけれども、それは餘り知れ亘つて居る事柄てあり、佛の德の偉大は今更ら申す迄もないことてあるから、その廣く說いてある中から極めて大切な點を少し摘出したのてある。「大なる哉大悟大聖主」といふのは、釋迦牟尼佛の偉大を感歎したる言葉てあつて、その釋迦牟尼佛が備へて居られる德は「垢無く染無く所著無き」て、普通人の有つて居る煩惱の垢とか染りとか執着とかいふやうな穢ない物は悉く除かれて、純金の少しも混りの無いやうな正しき覺を得て居られるのてある。さうしてその覺は唯だ自己だけの悅びに止まつては居ない、直ちに他を救ふが爲に「天人象馬の調御師」となつて——天人といふのは天上界と人間といふやうに見ても宜いが、これは高き位地に居る人と普通一般の人といふやうな意味に見ても宜いのてある、どのやうな地位の高い人ても、即ち印度て言へば、婆羅門種或は刹帝利種の者ても、又首陀、毘舍等の一般人てあらうとも、總てに對して、奈何なる地位高き者にも、學者にも亦一般の平凡人にも、皆佛は救濟の手を下し給ふのてある。それを譬へに寄せて、象や馬を山から引出して來て、之を馴らすといふことは中々難かしいことてあるが、その人間の荒馬や荒象の如き、缺陷多き者を釋迦はよく整へて調養をなさるからして之を調御師といふのてある。決して社會に沒交涉な教てはなくして、最初に申した通り現實を向上せしむる基礎は、各人の人格を陶冶するより大切なるは無い、人格から陶冶せずして他を論ずるのは本を築かずして末を論ずるやうなことてあるから、釋尊の教化は各個人の荒馬、荒象の如き人間を調御されたので、人格よりして陶冶なさることを頌讃した言葉てある。さうしてそれは「道風德香一切に薫じ」て、唯だ迷信の宗教を開いたのてはない、奇蹟の宗教を開いたのてはない、道風德香に依つて一切の者を薫化して行くのてあつて、道德的の風なり香りなりに依つて多くの者が教化されて行くのてあるから、その道風德香は人々の苦悶を解脫せしめて法悅に活きしめ、罪惡を滅却して正善に歸せしめるのが道風德香てある。

それは釋尊の心から出ての作用を言うたのてあるが、次の句は外部にある相の尊とさを頌讃するので、智慧の側と慈悲の側と、それからその相の美とをいふのて、これが眞善美といふ今日の哲學上の言葉に合して居るのてある。始めの垢無く染無くは眞を說き、道風德香は善を說き、紫金の暉は美を說いて居るのてある、所謂眞善美の結晶せる絕對の人格者なることを說き得て居るのてあります。その相は外部に現はれては有限的なるも、その本體は無限絕對てある、人に接觸を取るには有限てなければならぬか

ら、一丈六尺の相となり、その美しさは紫磨金色の光を發して居るものである。併しそれは「示して」である、その人間に示同することがないとしたならば、無限であるから、その無限を現はすが爲に「示して」といふ言葉があるのである、その言葉が大事である、示さなければ唯だ絶對といふのみで、その美が現はれない。又現はれた有限を以てそれだけだと思うてしまへば、その無限が判らぬから、「示して」といふ事は法身と應身とを繋いで居る言葉で、所謂法應不二といふことになる、法身の絶對と應身の有限とを結びつけて、即ち法身應身一體不二、往いては三身即一といふことを現はす所の言葉が、この「示して」といふ一字に於て、それだけの意味が含有されて居る譯である。この「示して」といふ一字を能く了解すれば、弘法大師や法然上人などの陷つたやうな、あゝいふ暗愚な佛身觀には成らぬ譯ぢや、彼は「示して」といふ字さへも解しないと言つて宜い譯である。それてその三十二相の相は、「方整照曜として」どの方面から見ても、御目は青蓮の背慈悲に充ち、御髪は螺髪の相色鮮かにして實に美しい髪を有つてお居てになり、その胸は師子の胸であるといふやうに、全身何處にも缺點の無いやうな美しい相をお有ちになつて、さうしてそれが透き通つた程な美しさであると申すので、これは言語を絶した程の美の御相であると思ひます。この眞善美の結晶の體だといふことも亦「示して」てあつて、無限の法身の現はれてある、それ等の意味が了解されゝば、先づ佛身觀の大切な點が意識される譯である、それを詳しく說くか概括して見るかといふだけて、大事な點はこの前單な言葉に現はれて居る、これが法華經

壽量品に至つて顯本されゝば、この意味合を徹底して解釋することになる譯てあります。

說法品第二

次に說法品は、釋尊一代に說かれた佛教に就て、之を見分ける上に方便と眞實の分界を明かにすべきことを敎へたので、釋迦一代の說法を混亂に陷らざらしむる爲に、說かれたのてあります。佛から言へば說法てあるが、後から言へば佛敎てある、その佛敎の方便、眞實の關係を頗る分明に分界したるものが、この說法品の本旨てある。故にこの中に有名な「四十餘年未顯眞實」の文も現れて來る次第てある。

四、性欲無量なるが故に說法無量なり、說法無量なるが故に義亦無量なり、無量義とは一法より生ず。

釋迦牟尼佛が何故に佛敎を種々樣々に說き分けたかと言へば、それは機根が種々樣々に分れて居るが故に、之を導く手段として種々樣々に敎を說いたのてある、けれどもその敎を與へる本に戻せば、統一の妙法に外ならぬといふことを敎へたのがこの文て、「性欲無量なるが故に說法無量なり」——敎を受ける方の人の性質と欲望が樣々に分れて居るから、之を導いて來る說法としても、又樣々に義理が分れて出たのてある。性といふのは先天的に有つて生れた本性、氣質てある、欲はその時々に動く欲望をいふ。有つて生れた氣質も違ひ、その時々に有つて居る欲望も違ふが故に、それが所謂宗敎心として現はれても、哲學風な眞理の要求から進まんとする者もあるし、道德的の善の觀念から進まんとする者もあるし、純宗敎の神秘的利益より進まんとする者もある。その他

同じ宗教心に於ても樣々なる違ひがあるからして、哲學的に道を求むる者の爲には眞理の說明から導かなければならぬ、道德的の要求には善の方面から導かなければならぬといふやうな譯である。況してや宗教心を起し得て居らぬ雜然たる人心の千差萬別なることは、殆ど算へ得ない程の樣々なるものであるから、その樣々なるものに對して導きを與へたる說法としては、種々なる說明式が起つたのは已むを得んことである。その說法が樣々に分れて居るが故にその中の義理も、方便の敎の方から言つたら佛敎は分裂的なるものになるのであるけれども、それは當てがふといふ方から起る佛敎であつて、如來の覺の側から、之を自分の覺に來らしめ、即ち如來の眞實の敎に基かしめやうとする時に於ては、何者に對しても變りのない唯一絕對の法があるのであるから、その統一的の妙法から現はれて、樣々なる義門を說き擴げたに外ならぬ。故に一より多を出し、多より一に歸するといふことになるので、無量義の多は一法より生れたものである、今はこの無量義に說き分けたる佛法をして、統一の一法に歸着せしめんとするが故に說法品を說いたので、續いて法華經に來つてその統一の妙法をお示しになるといふ順序になつて居るのであります。

それでこの說法品は、昔から王の前に働く將軍の如しというて、法華經の方は王者の德の如くに寬容仁愛の敎であるが、その前に無量義經の將軍の膺懲するが如き敎があつて、方便の敎は眞實を顯して居ないと言つて、その缺點を指摘した譯である。それ故に法華經に入る前に必ずやこの說法品を熟讀して、一切經の方便と眞實に關して明瞭なる意見を持たなければならぬ。法華經を研究し日蓮主義を研究しても、往つたり來たりして何處まで往つても方便の敎と眞實の敎の順序撰擇に迷ふやうなことては、法華經の眞意は判らぬてあらう。玆で截然たる方便眞實の區域が判つて、而して始めて方便品の開顯といふことが判るのてある。この權實の分界が明晰てなくして開顯に入つたならば、それは必ずや混亂の失に陷るのてある、叡山の佛法が法華經の開顯の側のみ言うて無量義經を忘れたが爲に、途に混亂して今日雜亂と言はるゝが如き狀態に陷つたのてある。今の日本の思想界が西洋の文明を受け容れるに就ても、同一の失を繰返して居るのてあつて、先づ西洋の思想の缺點の方を明かにして、それから今度採用するにしても、その缺點を意識して、明晰なる觀念の下に之を容れなければならぬ、「破開」と言つて破る方が先きナンてある、容れる方は後ナンてある、所が近來の學者は破る者を「古い頭腦ぢや」と言つて、いきなり輕卒に容れやうとして居る、殆んど日本の佛敎の方便の敎に居つた諸宗の人が、無量義經を讀まず法華經を尊ばずして、今尙ほ地藏經や藥師經に拘泥すると同一の態度てある、故に西洋の文明を受け容れるに就ても、法華經の破開の網格を手本として、大いに警戒すべきてあります。斯の如き釋迦の一代の大敎化の如きは、文明を鍛錬して行く上に就ての大なる模範を示して居るものてある、殊にそれが歷史に現はれて叡山および日蓮に依つて爲されたるその經歷を考へ、日本の今日の佛敎が何時までも混沌として眞價を發揮し得ない點に考へたならば、今日西洋文明を容れるに際しても、今のやうなことてあつたならば、永遠に累を日本の文明に流す

であらうと、思ひやられる次第であります。それ故に生半熟のハイカラ學者なんといふ者は、實に恐るべき者と言つて宜い。丁度叡山に證眞といふ學者が出て、これは非常な博學强記の坊さんで、澤山書物を書いたが、それが叡山の佛敎を滅茶々々にしてしまつた、即ち二圓同と言つて、法華經の善い所と爾前の經の善い所とひつつけて、善い所は同じやうに善いぢやないかといふので、この權實の分判を明かにせずして、二圓の同じい方のみを力說した爲に、混淆、雜亂の失に陷つた。日蓮聖人はそれを慨歎して、「日本國の謗法は爾前の圓と法華の圓と一といふ義の盛んなるより事起れり」と喝破せられたが、今や日本の文化も正しくそれであらうと思ふ、西洋の圓と日本の圓とは一なりと言つて居る、又甚しきに至つては日本は圓にあらずして偏であつて、西洋の方が圓だといふやうなことになれば、それは丁度慈覺や智證が法華經を捨てゝ眞言に降服して「法華は劣り眞言勝るゝ」と言つたと同じ誤りに坐する譯である、それは證眞以上の謬見に坐する譯である。何れにしても證眞の二圓同の間違ひ、慈覺、智證の法華劣り眞言勝るゝといふ謬見などは、實に我が思想史の上に於てその失態を明白に暴露して居ることである、今日日本の佛敎が斯の如く混亂して今尙ほその光を顯はし得ない點から考へたならば、今や歐米の思想を受容れるに就て、大なる龜鑑となる譯であらうと思ふのである、それ故に始めから「他の宗旨の惡口を言ふな」といふやうなまぬるい頭腦ではいかん、惡口ではない、思想は先づ正邪を明瞭に意識し、寬容はそれから後に起るべき順序である、正邪を嚴密に明かにせずして、輕卒に寬容を叫ぶ者は

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民敎化　金貳圓貳拾錢
○法華　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　各卷壹部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四拾錢　送料一部金拾八錢

○大藏經要義　一部金參圓八拾錢十一卷迄既刊　送料一部金十八錢　全製金參拾錢　上製金五拾錢　送料一部金貳錢
○法華經要文　全半年前金送料不要
○佛敎信仰の正統　金壹圓參拾錢郵稅六錢

以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

統一定價

一景	金參拾錢
一ヶ年	金參圓參拾錢

送料一錢
送料共

廣告料

一頁	金拾圓
半頁	金六圓
四分ノ一頁	金參圓半

前金の事

大正十一年二月廿七日印刷納本
大正十一年三月一日發行
（第三百二十六號）

不許複製

編輯兼發行人　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　國友日斌
印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　鈴木日雄
印刷所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　三秀舍
發行所　名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常泉寺內　統一發行所　振替東京五一〇七一番
編輯所　統一編輯所

目次

法華經の倫理觀（時言）……本多日生
政道と佛教……本多日生
法華三聖に對する感想……井上哲次郎
本化の慈光……笹川日堂
記事報道十數件……
法華經要文講義……本多日生

第廿六年四月號